明治四十五年一月二十日發行

婦人衛生雜誌

第二百六十六號

婦人衞生雜誌

第二百六十六號目次

大日本婦人衛生會二月例會通知

來る二月四日(第一土曜日)午後一時半より神田一ツ橋通り女子職業學校内に於て本會例會相開き左の講話有之候間萬障御差繰御來會被下度候也

一、眞空掃除器械

(貨物運轉使用供覽)

醫學博士　遠山椿吉君

明治四十五年一月

私立大日本婦人衛生會

前髮心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新帰朝者美容術界の明星たる岡崎ユン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髮心壹個の目方

壹尺　中	弐匁四分
壹尺弐寸大	三匁四分
壹尺五寸極大	五匁五分



講演

大國民の衛生

醫學博士　二木謙三

日本は秋の國　今日は結構な御日和でございまして私が此會に參りますのに、神田の通をズッと通つて來ると、歩いて居る人は皆元氣克く、勇ましい風をして居りましたので、私も其を見て今日此處に參りますのに一層勇んで來たのであります。

抑も我が國は豐葦原の瑞穗の國と歷史上にもとなへられた通り稻の多く生ずる土地であつて、殊に今日此の頃は其の米の稔る時季で何となく人の心も賑やかな所から、日本は秋の國であると云ふので秋津洲の名もあります。實に日本人には秋は天の惠の最も多い時で此の麗はしい喜ばしい秋の日に特に本會總裁　宮殿下の御臨場あらせられまする榮譽ある此の會場に於て、大國民の健康と云ふ研究をすることの出來まするのは、誠に私の身に餘る光榮不肖を省みますと云ふと甚だ恐縮に存ずる所でございます。

婦人の重任　此通り道行く人でも、店に働く人でも机に座する人でも、皆勢ひ克く今日の日本の盛況を呈して居ると云ふ現象は抑も何處から起つて來たのでありませうか、是は畏多い事ですが、上から下々に至るまで皆心を一にして此國の爲に、斯の道の爲に盡すと云ふ考一つから起つて來たのであります。又衛生の方に關しては、殊に此婦人衛生會、即ち本會は早い時から大變に盡力になりまして、日本國に盡されたことは實に尠くない、其御蔭で今日あることを悅ひますれば、此婦人衛生會の隆盛は國家と共

に益々進み行かなければならぬ筈のものであります。今日は斯くの如く萬國泰平の樣でありますけれども、翻つて其裏面の方を考へて見ると、其裏面に於ける實力の競爭と云ふものは、又私が申すまでもなく非常に激しいものであります。而して其の實力の戰爭の武器は何でありましようか、取りも直さず身體並に精神の健康と活力とであります、所で實際には世界中其の實力の戰爭に敗北し、又負傷して居る人が、數少くないことは、例へば日本にても何處の病院を見ましても、病室は皆滿員になつて居ることでも能く分るのであります、而して此實力の戰爭に於て、日本國をして勝利の位置に立たしむることは誰の力でありませうか、兵力の戰爭に於ては既に陸海軍の力で勝つた事は皆さんの御承知の事であるが、此平和に於ける實力の戰爭には誰が勝たしむるであらうかと申しますならば、私は御婦人の力に依らなければならぬと思ひます、婦人の健康は國民の健康であります、此婦人衞生會に於て學び得たことの方法に由つて、實行して現はれました健康は、即ち國民の健康となります、如何となれば婦人は國民の母であるのであります、母の健康は子に及び母の修養は悉く是は子に傳はることであれば、御婦人方の今日まで盡された所の功勞は實に大なるものであり、又今後負はなければならぬ責任も亦大ではございませぬか、そこで私は及ばずながら是から今後子供となつては如何に、母となつては如何に、成人となつては如何に、老人となつては如何に養生法を守らねばならぬかと云ふこと、男となつては如何に女となつては如何に、又健康狀態の時は如何に、病人となつたら如何にするかと云ふことを大體御話して見やうと思ひます、固より短かい時間でございますから大體を御話するだけに止めて置かうと思ふのであります。

○小兒の健康　先づ此國民の數が多かつたならば、從つて子供の數は其國民の數の倍以上もあつて宜い筈でございます、子供と云ふものは實に澤山なもので、

二人の家庭に子供は三人、或は四人もあると云ふことから考へて見ても、日本國中の子供の數は實に多い、其多い子供の衞生と云ふことを能く守らなければ、縱令今日榮えても、此次の代には榮ゆることは出來ませぬ、どうか此子供の衞生は大切であると云ふことに御注意を願ひたいと思ひます、そこで子供の衞生と云ふことは、子供一人で出來ない、是非阿母さんが之を助けなければならぬので、其最も必要な條件は

母の乳　第一日本人は何處までも阿母さんの乳で育てて行かなければならぬと云ふことを御記憶を願ひたい、どうかして牛の乳などは先づ病人が飲む位に止めて、子供には飲ませたくないと思ひます、所が世が文明となると、西洋の風に倣ひまして段々阿母さんの乳を飲ませると云ふ習慣は少くなり從つて皆牛の乳で育てるやうな惡習慣となつて參ります、さうして又文明となつて段々交際が激しくなりますから婦人の仕事が多くなる、婦人の手足を使ふことは少なくなつて只腦髓をつかひ心配苦勞が多くなり、從つて婦人の乳房の發達は段々惡くなるばかりでありまして、乳の出ない婦人が澤山になるやうになります、是は國家の盛衰に關する問題になつて參りますので、西洋諸國では非常に之を憂へて豫防策を講じて居ります、所が日本の婦人は、殊に私共が西洋に於て研究を致しました時、私の教師などの申さるゝには世界中の婦人の模範を取りますのに、何處の國か一番宜いかと申しますると、今より三四十年前の日本の婦人であると言はれて居る、そうして尚ほ私に申さるゝには、日本が婦人の模範國だによつてお前も日本に歸つたら亞米利加などの風俗を眞似ぬやうに、婦人と子供の衞生を重んじろと云ふことを言はれて參りましたが、幸ひ歸つて見ますると一部の杞憂がないでもありませんが唯今御話致しました通り、日本國民の元氣が益々盛んでありますから是は其母たる人の養ひが其宜しきを得て居るからであらうと思ふて悦んでをります、何卒今後共本會の

保護によりまして、其良習慣を破らぬ樣に致しまして一個人より見まして可愛い子、又國家より見まして後繼者たる尊い子を、人手に放任せずして大事に母の乳で育てる樣にして願ひたいと思ひます。

溫め過ぎぬこと　其次には子供を育てるのに湯たんぽを用ゐたり、或は綿などを重ねてそれに包んで育てるやうな習慣が時としてありますが、是は善いことではありませぬ、何うかして阿母さんの肌即ち健康者の三十六乃至七度の溫度で、子供を溫めて養つて行くやうにして欲しい、湯たんぽなどで適度に溫むることは到底望み得られぬ、或は熱過ぎ或はさめる、さめることを恐るゝ爲めに注意をすればする程熱過ぎる傾がありますから、子供の體に過度の發汗を致しまして、或は烈しくなりますると鼻が詰る、息が出來なくなり夜中に泣く、是は大人でもさうです、暑い處に長く居りますと鼻が詰つて參ります、それは皆さんも御承知でありませう、是と同じやうな譯でありますから湯たんぽの過度の熱で溫めずに三十六乃至七度、即ち人間の健康の溫度で溫めれば、それより良い事はないのであります、自然界を見ましても鷄が卵を孵化せしむるにも鷄が抱いて肌で溫めるのであります、又老人になつて冷える方は孫などを抱いて休みますと大層暖かであり之に反して懐爐や溫たんぽでは上ぼせます、西洋では母が子を生んで之を人手に渡して育てさせる惡い習慣があります、日本の從來のよき習慣はたとへ世界は如何にあらうとも日本は日本であります、善い點は是からも破らぬやうにして戴きたい、此二點を御注意なされたならば、乳兒の養生法は能く行屆いて居ると思ひます。

我儘させぬ　是から先き年取り次第成るべく子供に我儘をさせぬと云ふやうに御注意を願はなければならぬ、阿母さんは子供の我儘の程度を良い工合に取扱はなければならぬ、親としての考はどこまでも通すやうにして行かないと、後になつてから父や母の言はるゝ事をきかない子供が出來て參ります、さう

すると是は國家の爲に宜しくない、父母の言ふ事が子供の頭に入らなくなる、學校の先生の敎も子供の耳には、馬の耳に風と云ふ風になつて仕舞ひますから、何でも子供に我儘をさせぬやうにしなければいかない、子供の我儘は生後七八ヶ月より萌して參ります故に初めの仕附けが大事であります。それが爲めには此老子の言葉がございます「慈故能勇」斯う云ふ事を老子も言はれて居りますが、是は卽ち子供に對して能く可愛がる惠むと云ふ情の心があるからして、其處で母親は勇氣を出して能く子供に我儘をさせぬやうにして行かなければならぬ、「慈故能勇」卽ち情け方では子供が我儘になつて、大きくなつても阿母さんや阿父さんの命令に從ふことが出來ない其處を道と云ふ道理の上に立つた處の勇氣で以つて是より以上は我儘はさせないと云ふ決心が、今からお若い方々の胸になければならぬのであります、戰場に立つて、或は刀或は鉾を持つて戰ふのは男の勇でありますが、內に居つて子供の心に對して與へる所の勇氣は母の勇であります　男と女、外と內との差はあれど國家に對する道に至つては二つの差はないのであります。

學生の健康　それから學校時代の人の衞生に最も注意なさらなければなりませぬ、是は女の子も同樣ですが特に男の子になりましては、

筋骨の發育　先づ筋肉の發育を圖らなければならぬのであります、筋肉や骨の發育には一定の時期がありまして此の學生時代を空しく經過致しますと、骨や筋肉の發育が止まつて仕舞いまして其の後にはいくら勉めても駄目になります、而して其筋肉の發育は、唯太れば宜いと云ふ譯のものではありません唯脂肪で肥つては男はいけない、何んでも筋肉で肥るやうにして行かなければいけませぬ、それには適度の運動、卽ち適度の郊外の散步等が必要であります阿母さんは宜く其程度を計つて之に運動を授けることをして、筋肉と骨との發育を圖る樣にして行かなければならぬのであります、此處にお目に懸けます

のは私が西洋を旅行しました時に、人の體の最も健康な姿はどうかと云ふことを、研究致して得たところの二枚の寫眞でありますが、一枚はアレキサンダー大王の石像の寫眞で、彼の人は世界を征服した方であるが、さう身體は大きい方ではなかつた、併し此筋肉の釣合が能く取られて居ることが、其當時に出來ました所の大理石の石像に能く現はれて居る、まう一つはヘラクレスと云ふ人で、此人の體も脂肪では肥つて居らないで、實に筋肉が美くしい發達して居る狀態が明であります、そうして此の筋肉を鍛へる法は運動の外はありません、運動には其の體質の强弱又は嗜好に應じ種々の仕方がありますが何んでも宜しいのであります、特に其の中、女の子にも男の子にも、若い人にも老人にも出來る運動は、先づ成るべく山や野に出ることでありまして即ち郊外の散步、運動が大切であることを忘れてはいけませぬ、唯學校の運動場等に於ての運動に滿足しては不足であります、況んや日本には中年以上の人には運動と申すことはありません、此の點は西洋の方は宜しいので、又日本にも明治の初年頃迄は老少を問はず武藝馬術等で鍛へたものであります、今日では先づ日曜とか土曜とかには必ず兄弟老幼一緒に打連立つて郊外に散策するやうにしなければ日本の元氣を何處までも傳へて行くことは出來ませぬ。

勞働　其外男の人にも大切であるが特に女の人に必要なことは働くこと、勞働することと、家の内外の掃除などを勉强することであります、自分の爲めにもなり又人の健康をも助けます、働く人には病氣は少なく、又た健康なる子孫が出來ます筋肉も發達致します。

寒さ暑さ　それからして其次には寒さ、暑さに堪へるやうに體を鍛へる事を注意しなければならぬ、是に於て私が此前にも一度御話致したこともありますが、此處にお居での方で聞かれない方もあらうと思ひますからお話して置きますが、私は大變に體が弱くつて、其弱かつた時にどうかして强くなりたいと

願ひましたが、どうも強くなることが出來なかつたので殘念で堪らなかつた、それで或時露西亞の一孝女の西比利亞の砂漠にあつた話を聞いたのであります。

○○○○○○

身體を鍛べし少女　それはどんなことでせうかと申すと露西亞の華族で或時に冤罪に會ひまして西比利亞の砂漠に流罪になつた、其時に阿父さんと阿母さんの間に娘がございましたが、可憐さうに少さい時から砂漠で育つた爲めに、其娘は世界と云ふものは其砂漠より外には無い、人間と云ふものは阿父さんと阿母さんとの三人しかないものであると思つて居りました、此子供が今少し大きくなつて、物が解つて來たらどうしませうと思つて、阿母さんが心配しまして其娘の十三歳の頃或日のことお母さんは膝の上に載せまして涙ながらに話して聞かせました、此砂漠から距るゝこと八百里の處に露西亞の都彼得堡と云ふ、街があつて、其街には大きな宮殿もあり美しい公園もある、人も澤山居つて皆奇麗に衣飾つて居り、私達のやうに悲しんで暮して居る者ばかりではなく、歡んで日を暮して居るのである、どうかお前も一生に一度は彼の都にやりたいと云ふことを話しましたが、子供の心には何故唯自分達は此沙漠に居るのでせうかと云ふことが分らなかつた、併しながらどうぞ私が行かんでも阿父さんや阿母さんをやりたいと云ふやうな心が起つた、十三歳の少女ではあるが、西比利亞の沙漠は寒い時は非常に寒く、暑い時も非常に熱い處であるが、どうして旅行したら宜からうかと云ふことを考へたのであります、此時には僅かに十三歳の少女であるが、子供ながらにも能く心付いたことがあります、人間の體は習はしに依つて能く耐ゆることが出來ると云ふことが頭に浮んで來ました、それ故冬の寒い日の時には外に出で、雪飛ぶ寒い風に吹かれ、或は水の凍つて居るやうな處に行つて寒風に當り、或は雪投げなどをし、さうして寒さに耐ゆると云ふことをやつた、それから夏の暑い日などになりますと、人は皆暑い〱さ

言つて木の下に入ると云ふやうな時に、自分は態さ沙漠の暑い處に出でゝ、燃ゆるばかりの砂礫の中で暑さに慣すと云ふやうにして、どんなに強い暑さにも、烈しい寒さにでも、此體は堪ゆると云ふやうに、練習致しました、さうしたら十六歳になると非常に丈夫な體になりまして、如何なる艱難にも打克てるやうになつた。そこで阿父さんや阿母さんに暇を乞ひまして、どうぞ私を無い者と思つて下さい、私が幸福に神の助がありましたならば、都に行つて再び私が御迎ひに參りますからして、どうか私を無い者と思つて下さいと言つて、志を起して、さうして一人で沙漠を旅行致しました、さうすると其中に途中で巡禮と一緒になりまして、それからずつと幾月か經つて沙漠を旅行して、遂に都に著いた、其都には非常に美しき衣服を著た人が澤山に街を流れるが如く歩いて居つた、それから其子供は皆が行く方に附いて行つたら大きな建物の中に入つた、其日は丁度王様の即位の日でありましたので、今日は王様の即位の目出度い日であるから、何んぞ無實の罪にでも逢うた人があつたら大赦を行ふから、申出でよと云ふ御命令でありました、そこで彼の少女が人々を押分けて進んで參りまして、父の寃罪を告げましたそれから王様は古い記錄を調べさせて被下ましたところが、何年の何月に成程さう云ふ事があつたので今から考へると何にも罪があつた譯ではないと云ふので、馬車に其子供をつけて阿父さんや阿母さんを迎へにやつて目出度都に還つた、それから少女はプリンスと結婚して一家が榮えたと云ふことであります、斯う云ふことから考へても何んな事でも仕様に依つては出來んことはないのであります、故に今日のやうな有難い泰平の御代には、さう云ふことは必要でなくなつて居りますが、併ながら百人に一人とか千人に一人とか、其中には悲しい困難に彷はねばならぬ人が必ず出でゝ來ることがないでもありませぬ、皆さんは其困難に當つて居らぬと思ひますが、此外には隨分さう云ふ方もあらうと思ひます、御知

合ひの方にても斯う云ふ人がありましたら、勇氣を起して困難に打克つて身體を鍛え、心を練つて、さうして日本國の爲に盡さんければならぬと言つて戴きたいと思ひます、即ち如何なる苦しい事でも、慣らせば慣れるものであると云ふことを御記憶して戴きたいと思ふのであります、小野の小町の歌に

　九重のふすまの奥も寒かりき
　　身はならはしのものにそありける

と云ふのがありますが、昔は九重の宮殿の襖の奥まつた立派な處にあつても尙ほ寒かつたが、今日は[illegible]を著て寢て居つてもまた耐えられるのにと云ふことであります。是は貴い方でも矢張り心懸の仕様があるので、賤しい者は賤しい者のやうに心懸の仕様があるのであるから能く御注意願ひます、それから又寒さ暑さに耐へる爲めに、

冷水と皮膚、冷水摩擦とか冷水浴とか云ふことが必要である、是は皆さんが幾度も御聞きになつたことでありませうから、今日は細かなことは申上げませぬ、關寛と申さるゝ八十二歳の老人が北海道十勝國斗滿と云ふ處から一年に一度づゝ下駄懸で來らるゝので、其方が私の家に來ますと直ぐと奥に通りまして子供の著物の數を調べて、一枚でも餘計に著せて居りますと、直ちに母を呼んで叱ります、斯んなことをしてどうする、こんなに日本の國民を弱くしてどうするかと叱つて、來年來るまでに良い習慣を付けて、一枚でも減じてお置きなさいと言つて、家内を叱つて行く、さう云ふ親切な方でありますが、此方は八十二になりまして十勝の斗滿と云ふ所は寒い——火鉢に火を容れて客の處まで持つて行く中に、指が凍り付くと云ふ位寒い所です、其處に居つても此方は矢張り極々薄著をして凌いで居る、さうして每朝二時に起き水を浴びて牧場に出て行かれるのである、先づ學校時代の健康は此位にして置きます。之から段々寒さに向ひますから格段に御注意を願ひます。

成人の健康　成人になると仕事が多くなつて頭を息

める隙がありませぬから、日曜とか土曜とか祭日とか云ふやうな日には、必ず郊外散歩をなさるやうにしなければならぬ、其間に何でも世の中に立つて、頭を使つて居りましたところはすつかり忘れて仕舞ひまして、自然を友として樂しみもし、又氣を轉じてさうして修養の事でも考へて、どうしたら自分の人格を養へるか、どうしたら志を研いて行かれるかと云ふやうな問題を考へ、或は神の事、或は佛事の信仰をすると云ふことを考へても宜い、或は孔子樣であるとか、又は先哲の思想でも能く頭の中で其問題を考へて、靜に空氣の良い草木のあるやうな處に散歩すると云ふやうになさるのも宜からうし、或は勢よく山野を跋渉すると云ふことも宜からう、斯う云ふやうな事は大に必要なことであります、それからして男子は成るべく大酒をせぬやうに心掛け、其の上又御婦人方皆さんの力で以つて男子の飲酒を制して載きたい、お酒は健康に害あると云ふことは誰も申されるのであるから、お止めになつたなら宜からう、それは一身一家の爲めのみならず日本國民の健康の爲に必要でありますと云ふことを、皆さんから御勸めして載きたい、次に勞働をする人や適度に身體を使ふ人々は何時でも健康でありまして至極結構な事でありますが、要路にあつて多忙なる方々になると往々其れが爲め身體を害する事がある、精神は肉體と同時に使用せねばならぬ事に御注意を願ひたい、宴會の多い時には胃腸を害せぬ樣に、又滋養物を除り過さぬ樣にするがよいのであります、睡眠も適度にして多からず少なからざる樣に願ひたい、先つ何より大酒は一番惡いのであります、老ひて後に病氣が起つて後悔を致します、皆さんは酒の點には清淨潔白でありますから、何でも御婦人の力で以つて男の酒を制して行かなければならぬ、今より少し前迄は女であつても酒を飲む人があつたのでありますが、今日は教育の御蔭で全くなくなつて仕舞ひまして是は國家の爲め甚だ結構な事であります。

老人の健康　それから老人の健康でありますが、

十以上にもなりました後は何うしたら宜しいか、是まで私は學校の書生さんなどに、若い時には寒さを凌ぎ、暑さを耐え、腹がすいたり、或は體を使ひましても苦しみを致しました時でも、何んでも艱難に打克つやうになさいと申しましたが、老年になるとこれと反對で、是まで拵へ上げた體を、どうかして保養して壊はぬやうにして戴かなければならぬ。老人の澤山ある國は風俗が敦厚である。青年は國の元氣であり國威の發揚者であると共に老人は秩序の保護者であつて綱紀の維持者である、老年は國の經であり青年は國の緯である、東西文明の過渡時代は多く青年の手に待つたが、今日は其の時代はまさに終つて今や堅強なる經緯を以て新日本獨特の新文明を組織せねばならぬ時であるから、老人はます／＼自愛して戴かなければなりませぬ、御年寄を大切になさるのは、何んでも健康を傷はぬやうにしなければならぬ、是は皆さん若い方々が暑さに向ひ又は寒さに向つて海岸に避暑又は溫泉に避寒でもなさらうと云ふ時には先づお年寄を先におあげになつて、私共は何うでも宜うございますから、お祖母さんお先きにゐらつしやいと、斯う云ふやうにしてお祖父さんやお祖母さんの健康を損はぬやうにお考へにならなければならぬ、それから又飮食を愼まなければ、御老人の健康は持てぬ、又冷えないやうになさらなければ御老人の健康は保てぬ、それからお年寄になると運動不足になるから、靜かに息の切れぬ程度に運動もなさらねばならず、又姿勢を正して靜座もなさらなければならぬ、又睡眠を妨げぬ樣又心配などをさせぬ樣心懸けなければならぬ、是は御老人の方に向つて、皆さんは御注意なさるべき必要があります。

（以下次號）

叢談

松竹梅

醫學士
藥學士　高橋學而

松

その一、姫子松

子の日する野邊に小松のなかりせば
　千代のためしに何をひかまし

むかしは初春の子の日に、大宮人が野末へ出て、小松を引いて遊んだのが因となつて、今ではどんな樵夫、漁翁でも春といへば己がじし必ず門松を立て屠蘇を酌んで祝ふ時節となりました。門松には普通黑松を立てる。其外赤松、新羅松、落葉松、五葉の松、姫子松——少し松づくしか何かの様になつて來ましたが——などがありふれた松の類で、此外にも數えたてれば隨分澤山出てまゐります。姫子松は五葉の松の一種で、兩ながら五本の針葉が一冠を共に頂いて居りますから、子孫の榮える祝又はめでたい事の例には、いつも引き合に出される者です。

その二、赤松

赤松は又女松とも云ふ。先年さる學者が、赤松亡國論を唱へて、大に世上を驚かした事があります。ざつと申すと、「大昔のまゝで一度も斧斤や、山火事にあつた事のない所謂大古林は——勿論その風土、氣候、緯度の多少、土地の高低に依つて、一概には申されませんが——日本などの大古林は、常綠濶葉樹の林である。こゝへたとひ松や杉や、又は梅樫栗くぬぎの種子が落ちても、或は生えないか、若くは生えても、生存競爭にまけてそだたずに仕舞ふ。併しこの地味豐饒な山林も、度々鐵と火にあふと、土地が次第に瘦せて來て、遂には落葉濶葉樹に適した地味になる。この時はまだ松杉はそだたないが、樫樟

の類ももう榮える事が出來ぬ。火事若くは斧の這入る度が重なるにつれて、地味は次第に惡くなり、其土地に繁盛し得る植物の種類も追々變化する。大體の順序をあげて見ますと、落葉濶葉樹——梅櫻楓紅葉の次に、扁柏杉となり、杉の次に黑松となり、黑松が絶えず切伐されると其次は赤松の林となり、次いで杜松となり最後に禿げる。赤松時代から赤禿時代まで決して余り遠くない、白髮と禿頭位緣の近い所である。

日本の山又山は何處へ行つて見ても赤松である。計りでない、大部分はもう禿げてゐる。人が禿げれば余生が短かい、山が禿げればどうなるか。之からが赤松亡國論の出つて來る所なのです。

その三、赤松亡國論

赤松山、若くは禿山の時代が來れば、建築材、器具の材料が拂底する計りでなく、薪炭、燃料が減ずる計りでなく、製紙の原料、鐵道の枕木、マッチの軸木が無くなる計りでなく、年々の水害で米が一粒も取れなくなつて仕舞ふ。氣候が不順になつて、文明の發達が皆無になつて仕まふ。夫れは何故でしやうか。花瓶に活けた花でも、少し大きなのになりますと、數日の間に一合位の水は吸ひ上げる。幾十百里の山の滿山の樹木が、二六時中に根から吸ひ葉から（殊に濶葉樹の葉面から）蒸發させる水量は、夥しいとも愚かな程である。之が若しあべこべに、禿山計りとなつたらどうちやろうか。一雨ふる毎に地面に水分を吸ふゆとりもなければ、之を次第に蒸發さしてくれる草木もない。だから雨はすぐに山から川へ川から大河へ、大河から海に流れこむ。非常な勢で流れて、又同時に山の土砂を川床まで持つて行く。川床は次第に淺くなつて、仕舞には四圍の平田より高くなります。そうなれば大雨毎に河川の堤坊は屹度切れて近所の水田は泥水につかり、土砂を以てうづめられる。大雨は一年に必ず十回も二十回もありますから、若し全國禿山計りとなれば、全國の田畑は年に十回も二十回も川砂にうづめられる道理にな

つて、遂には米一粒もこれなくなるわけなんです。又山林の樹木が或は雲を冷して雨とし、又は水を蒸發させて水蒸氣として與れなければ、氣候の調節は大きに減却して、生活が頗る困難となり、從つて人類の進歩發達までは手が屆かなくなる。之が即ち文明退歩の原因です。申すまでもなく、水蒸氣が凝縮して水となる場合には、そこの空氣は溫まり、又水分が蒸發して水蒸氣となる時は、近傍の空氣は冷却致す。

その四。西行法師

之程の程度には容易にならんにしても、雨ふりの度に、川には大水が出て、山附近では山津浪地上りがある代りに、御天氣が二三日つゞくと、清水も涸れて、川々の水は殆どなくなる。たとへ今時に爺婆が生きて居ても、川へ洗濯にも行かれなければ、西行法師がその旅行中に口が乾いても、一掬の水をのむ事も出來ない。

道のべの清水流るゝ柳かけ
しばしとてこそ立とまりけれ　西　行

我國の水力電氣業などは、無論追々減退する許りである。之までが赤松亡國論の大意です。以上の所說は大體に於て理論上正確で、又實際現代の國情に良くあてはまつて居ると思ふ。即ち大いに傾聽すべき說だらうと考へます。

例へば日本は今、禿山の多いのに大變困つて居る。――尤も大概の家で一個づゝは困られて居りますが――中國筋などへ行つて見ますと、山又山とことごとく赤禿で、目下山津浪を防ぐ爲に、砂防工事の最中である。東北以外の山林には殊に赤松が甚だ多い。大低の河川は、川牀が附近の平田よりも高くつて、大雨の度に毎々堤が切れる。山が極めて多くつて、從つて川の傾斜が急な割合には、平時の水量が足りないから、水力電氣を起し得る川がたんとない。大雨の度に地上り、山崩れは數限りなく出來る。要するに赤松亡國論、即ち山林濫伐の爲に、國家の衰運を早めるといふのは、確かに一面の眞理ですが

御正月早々から、目出度ない御話は之位にして置いて、次には黒松に移りませう。

その五、黒松、ツンベルグ先生

黒松は男松とも云ふ。黒松を見る毎に、拙者はツンベルグ先生を思ひ出す。

ツンベルグ先生は餘程高徳の人であつたらしい。瑞典に生れて、當時の植物學の世界的大家、リンネの門に學び、三十四歳の時に日本へ來て、二年許り滯在せられた。その間に中川淳庵先生、桂川甫周先生其他大勢の醫者、學者を訓陶せられ、傍ら日本の植物學を研究して、歸國の後は直にリンネの後繼者となられた。日本へ來られたのは我安永四年（將軍家治の時）西暦一七七四年、その江戸滯在中の記事に次の樣な事が書いてある。

旅館に質問に來りし醫師の中、桂川甫周、中川淳庵の二人は、啻に毎日來訪せるのみならず、屢夜に入るまで傍を去らずして、物理學、經濟學、殊に植物學、外科學、醫學等、彼等の嗜好せる科學の智識を得ん事を力めたり。桂川甫周は大君（將軍家の事）の侍醫にして、葵紋服を著し、少壯快活にして、明斷の頭腦と温良の氣質とを有せり、中川淳庵は桂川氏より稍年長にして或大諸侯の侍醫なり。兩人殊に中川氏は、頗る蘭語に通じ、金石、動物、植物等、博物學上多少の造詣あり、此等の智識の幾分は、支那書及び和蘭書より得たるものにして、一部分は年々來貢の和蘭醫より習得せる者なり。此兩人は、筆紙に盡しがたき程親切にして、好んで吾等の用事を便じ、且つ出來得る丈吾等を利用して、學問上の智識を得んとする熱心熾くに堪えたり

此記事を見ると、拙者は有難くつて嬉しくつてたまらん樣な心持がする。吾々の祖先には、か樣に眞面目な、か樣に敬虔な、か樣に忠實な、か樣に偉大な人格があつたかと思ふ。之等の人が心の血をしぼつて、吾等に先立つて歎き、吾等に先立つて苦しみ、吾等の爲に犧牲者となり、先導者となつて、天下に號

告して、吾等の迷を醒まして呉れたが爲に、維新の鴻業も樂々と出來、今日の一等國にもなれたのかと思ふ。か樣な祖先を持つた我々は、決して世界に於ける劣等國民ぢやない。か樣な偉人を生んだ日本帝國は、未來永劫決して滅びまい。

その六、桂川先生、杉田先生

中川先生桂川先生達が、杉田玄白先生、前野蘭化先生について、僅か六百余語の和蘭の知識を便に、解剖書を飜譯しやうと試みたのは、之から六年前の事である。其以前には、開闢以來西洋語を解した者も西洋書のよめた者も殆ど一人もなかつた。從つて教師もなければ、辭書なども固よりない。こんな時代に、皆無にも等しい語學の素養で、專門書の飜譯を企てたんですもの、其苦心、其艱難はいかばかりだつたでしやう。大の男が五六人も寄つて、一日かゝつても一行も解らずに、仕舞には唯顏見合せて、大粒な泪を落したとかいてあります。

その七、蘭學事始め

委細は杉田先生の「蘭學事始」に出て居ますから、之位で止めて置きますが、子弟を持たれた夫人方は必ず一度御覽になり、又子弟の人にも御見せになるべき書物かと思ひます。

夫が僅か五六年の内に、和蘭人と樂々話が出來る樣になり、蘭書が自由によめる樣になり、更に當時の泰西の學術を、一と通りは心得たまでになつたんですもの、吾々如き懶惰生には、殆ど奇蹟としか受取れぬ位です。

夫でもまだ機さへあれば、あらゆる犠牲を拂つてでも、學問をばしやうとする、例へばツンベルグ先生の來た時でも、今で云はゞ侍醫頭か、醫科大學長程の身分の人達が、學問こそはあれ羈旅の一外人に、「筆紙に盡しがたき程の親切」をつくして、あらゆる日進の學術を教えて貰はふとつとめる。

併も之等の事が、一點の名譽心、利得心の爲でないと聞いては、拙者共は唯々諸先生の崇高な人格と絶大の根氣と非常なる熱心と、明晰な頭腦とを感歎し

て、感泣する計りです。

大部話が横道へそれましたが、日本の植物の學名は大低上のツンベルグ先生と、夫から餘程あとで來たシーボルドとがつけたので、殊に黑松の學名、即ちラテン名を、ピヌス、ツンベルギーと申します。之が拙者の、松といふ度にツンベルグ先生を思ひ出し又引いては中川先生、桂川先生、杉田先生、前野先生を思ひ出す理由です。之等の諸先生は、近頃になつてから何れも朝廷より御贈位がありました。

その八、松の利用

松は材としては比較的貴重でない。幹は曲りくねつて、木目は餘り奇麗でなくつて、質は脆弱で、おまけに何時迄も脂を吹く。だから棟とか、梁とか、又は杭木とかの外餘り使ひません。尤も水の中では割合に腐らないから、其方に使用する事があります。燃料としては、薪にも炭にも致しますが、之亦下等の薪炭たるを免れないので、火力が強くないのに拘らず、大變にくすぶつて困ります。但し瀬戸の陶器業者は、どうも松の火でないと、瀬戸物の出來が良くないと申して、現今も石炭などは使はずに、盛に松の薪を用ひます。兎に角松の用途が、大部分燃料である事は爭はれますまい。

田舍で松林の中を散歩をすると、殊にあけ方、夕月夜などには、一種の芳香が袖にしみる。夫れは實に何とも云へん良い香りで、其爲長くあと迄も精神が快活になつてをる。

下山歌　宋之問

下嵩山兮多所思　携佳人兮步遲々
松間明月長如此　君再遊兮復何時

之は松の幹や、枝や、葉に含まれる油類が、少しく空氣中に揮發する爲で、松、杉、樅の類は、凡て同樣の物質を含有してをります。之を或方法を以て採集したのが、所謂てれびん油で、其中には揮發性物質の外に、不揮發性の者即ち松脂も溶解してをる。てれびん油は油繪の繪の具をとくにも使ひますが、此外藥用上、工業上に其需用が極めて廣くて、現代

では、文明社會の必須品の一つです。

松を世人がほめそやす理由はいくらもある、第一はその操の色をかへぬ事、第二は千歳の壽を保つ事、第四はその無數の末葉が榮える事、第五にはその疾風、怒濤、積雪と戰ふけなげさ、第六には人をまつといふ名のなつかしさ、まだ考へたら外にもあるでしやうが、とに角春を祝ふには最も適した花卉の一つでしやう。

春來ては花とも見よと片岡の
松のうは葉に淡雪ぞふる

竹

その一、竹の種類

門松に竹を添える様になつたのは、徳川氏以來の習慣だと聞いた事がありますが、夫れか、あらぬか將軍家の世子は東照公以來代々竹千代丸君(松平氏)と仰せられました。竹も霜雪にあつて其操をかへない。竹の園生と申せば畏こきあたりの御事で、竹林精舍と申せば、其昔し佛陀が法を説かれた所である。

か様に目出度い竹は、豐葦原の瑞穗國には、到る處で見受けますが、噂づるや洋夾の方では一向にそだたない。

松は現花植物門の、裸子植物屬の、松柏科目の、松杉科中の縱亞科に屬する者で。梅は同門の被子植物屬の、雙子葉植物類の、離瓣花植物目の、薔薇科植物に列せられる者です。

竹は梅と同門、同屬の、單子葉植物類の、有穎植物目の、禾本科に屬する者であるが、更に竹の中にても、殆ど數百種、數千種の變態がある。二三の例をあげて見ますと、じねんこ、くま笹、矢竹、紫竹、寒竹、布袋竹、寒山竹、美女竹、孟宗、苦竹、淡竹。か様に竹の種類が多いにつれ、其應用も者に依つて少しづゝちがふ。概して竹ほど使ひ道の多い、又用い方の廣い植物は、ほかにないでしやう。一本の竹いもどんな風に使はれるかといふ事は、次の俗謠でも一寸見當がつきます。

竹になりたや紫竹の竹に、本は尺八中は笛

未はそもじの筆の軸、しめしりゝかしく
次には竹の生立ちと效用とを、ちやんぽんにして御話して見ませう。

その二、子葉

竹類は普通實生は致さない、ですから單子葉植物と申しても、竹の子葉を見た人は先づ以てない譯です。拙者が昔し或中學生に竹の子はなんだらうと尋ねたら、おれが卽ち單子葉だと卽答したのがありました。所謂竹の根は竹の地下莖である。故に竹の子はその枝若くは地上莖の若芽と見るべき者である。此若芽は、種子から萌す者とは大きに趣を異にして、幹或は枝の横つ丁、又は頭から出る芽と同格の者である。竹類は殆ど實を結ばないから、從つて種子から發出する萌芽も乃至は其時最初に生る嫩葉卽ち子葉も、普通では決して見る事が出來ない。尤も竹も絕對に結實しない譯でもありませんが、之は後に申ませう。

その三、竹の子、孟宗

竹の子時代の應用は、勿論之を食ふにありです。往

往雜多の竹の子の中で、食ふに適した者は甚だ少ない。まづ孟宗、苦竹、淡竹及び布袋竹位なもんであるが、就中前三者は、最も本邦にありふれた竹の種類で、竹といへばすぐ此三つの中を思ひ出す位ですから、以來は主に之等の事に附いて申のべます。食べて最も旨いのは布袋竹、寒山竹であるが、之は稍珍奇品の部類に屬する。之につぐのが淡竹であつて、之に次ぐのが苦竹である。まだけは其漢名の示す如く、少し苦味を持つてをるけれ共、然し料理の仕様によつては、殊に一度ゆでゝ、御味御汁にでも入れますれば、孟宗よりははるかに旨い。云ひ〱して見ますと、孟宗か一番まづい竹の子になる併し大きくつてたべでがあるのと、其時節がやゝ長いのとでやはり一番多く食られる竹の子です。孟宗は殊に材として殆ど使ひ道が無い爲に、現今では食用專門の竹と見做されてをる位です。孟宗の中でも赤孟宗は普通のより稍旨い。(御承知でもありましやうが孟宗といふのは元來は例の二十四孝の竹の子堀りの

姓名です。竹の子に滋養分があるかと申すと、之は殆ど皆無といつても宜しい、又消化が良いかといつて見ても、消化も頗る不良な方です。けれ共其期節には、全然之を勝手元から除外する程の必要もありません。竹の子に關しては、色々奇抜な料理法があつて八犬傳の後の方にも、その一つが出てをりますから、特志の方はやつて御覧になつたら如何かと存じます。

竹の子が追々急にのびて、若竹と出世する頃には、數日のひまに盡く皮を脱ぐ、俗に竹の皮と申す者は、植物學上には葉鞘と名けて、葉の變形の一種です。竹の皮は、草履を作る。下駄の表を作る。大きいのでは食物を包む。之等は凡て苦竹の皮で、孟宗の方は全く無能の藝なしである。

その四、竹の力學

大きな竹の子が、殆ど一夜にのびて呉竹となると、夫から二三十日の間に、殆ど其生長の全部を終る。其時は幹は勿論、枝も出來、葉も揃ふ。一體竹に限らず禾本科の植物は、稻でも麥でも、皆そうですが、その莖(地下莖も又枝も)には若干の距離ごとに節があつて、節と節との間は中空な圓筒です。

若し一定量の鐵を用ゐて、一定の長さの柱を作るとすれば、一番丈夫なのは、角柱でもなければ、普通の圓柱でもない。却て中空の圓筒が最も強固である。云ひ換へれば、同じ長さの者を作る時に、材料を同じ丈用ゐれば、圓筒形の者が一番強く、又逆に同じ強さであれば、圓筒形の者が一番わづかの材料で足りる。禾本科植物の稈に、上の方の目方が非常に勝つ者には、自然の妙機に依つて、莖が理想的丈夫な構造になつてをる。之以上の巧な考は、たとへどんな數學者、物理學者が出て來ても、決して案出し得る者でないです。道理こそ、如何に實のつた稻穗でも、二百十日の大風に、殆ど一本も折れては仕舞はない、植物界許りぢやなく、動物界でも、殊に鳥の骨格などを見ますと、同一の理法にすぐ樣逢著ます。飛鳥の骨格は、是非共輕くなければならぬ、又

扶搖に乘つて大空を駈け得る爲には、非常に丈夫でなくてはならぬ。夫故之も矢張、中空圓筒式の理想的の形を持つてをる。

斯樣に奇妙不可思議の現象を、自然の妙機とか神樣の攝理とか云つて仕舞へば夫迄ですが、ダルビン先生の進化論で巧に之を說明し得るのです。餘り枝葉の論に涉りますから、今日は之を省きますが、何種の學術にあれ、又は何等の現象にあれ、凡そ現代の思想上の事で、進化論を全く度外視しても、良いものは一つもないでしやう。

その五、御簾

外見上は二三ヶ月で一人前の竹になるが、實際肉がついて、之がしまつて、實用に堪える樣になるのは、若竹などでは少く共三年竹からです。竹を切る時も時節がある。夕顏棚のこなたより、顯れ出でたる明智光秀の樣に、夕顏の咲く時分などに切つては、ぢきに蟲が這入つてしまふ。必ず寒の中に切つて、若し目下入用でなければ、入る時まで貯へて置かなければなりません。

材としては、孟宗は殆ど全く利用せられない。淡竹は稍多く用ゐられ、苦竹は最も廣く、最も多く用ゐられる。其用途は、或は建築上にも使ひ、或は器具を造るにも用ゐる。用法は、或は其まゝでも使ひ、或は枝を拂ひ、或は短く切り、更に內部の節を拔いても使ひ、若くは更に／＼巧を施した上で役に立てる。用途も用法も殆ど千差萬別で、迚も一々は數え切れませんから、次には中でも少し凝つたのを二つ三つ御紹介致しませう。

みすゞかる信濃の眞弓引しぼり
我射る征矢に秋の風立つ

みすゞは信州の名產で「みすゞ苅る」は信濃の枕詞だそうです。今でも信州の人は乘鞍が岳などへ行つて、みすゞを苅つて來て、籠だの、行李だの、所謂みすゞ細工を作ります。大抵小指よりも細く、楊子よりも太い位な篠の一種で、之で造つた器具は仲々美事です。

その六、野田の城

竹で作つた者の中で、最も巧妙に出來てをるのは笛、尺八だらうと思ひます。餘り良い音の出るのを不思議に思つて中にどんな仕掛があるだらうかと、西洋人が尺八を破つて見た話もあります。

遠江の國は野田の城に、明日は落城か、明後日は落城かとまつ其夜其夜、櫓の上でせめて妙なる調が聞える。寄手の陣を去る十町の所、片岡のほとり、松むらの影に、夜すがら立ちつくす武士數人、やがて月は出た、松影あらはに、姿をかくすひまもない。あはれ法師武者ござんなれ、城上より響く銃聲一發

……

此の如くにして甲陽の猛將、機山法師武田信玄は死んだ。五十餘年の生涯と、甲信五州の地とを、唯一曲の笛に換えながら。笛の調が天下の運命を左右した傳說は支那にもある。九里山の一戰に打負けて、楚の項王が垓下に陣取つた時十萬の楚軍を散じ盡したのは、何山より何山の頂かけて、絶えぬ絃きぬ響いた簫の笛であるといふ。

楚に亡ぐる廿八騎のたそがれて
烏江の亭に柳ちるなり

その七、零丁洋

野田の城を甲州勢が攻めた時に、龜甲車と竹束とを用ゐたとある。文祿年間の朝鮮陣の時、有名な晉州の城攻めにも、矢張同樣の者を使つて、鐡砲石火矢を防いだそうだ。竹束と云ふのは、澤山の青竹を大きな束に縛つた者で、當時の彈丸は、之に當ると皆傍へそれたんだそうです。

もう一つ、面白い利用法は、昔し紙の無い時代には、西洋人は羊皮の鞣革に文字をかき、印度人は貝多羅葉の表に針で刻み、支那人は竹の上皮に小刀で削りつけた。だから今でも手紙の事を書簡といふ。簡は即ち青竹の上皮で、太い竹を幾つかに割つて、その中側の肉をけづり取つて、上皮だけ殘つた奴を、火にかけて脂肪を拔くと、そこで古の紙、即ち簡が出來上る。之をつなぐには鞣皮を用ゐた者で、「韋編三

たび絶つしとあるのは、孔子が易經を勉强した係り、その革の緒が、三度までも擦り切れたといふ意味なんです。又文天祥が張世傑に贈つた、有名な零丁洋の詩の中に、

人生自古誰無死　　留取丹心照汗青

とあるその汗青は、青竹に汗を出させたといふ字儀て、矢張り簡策の意味なんです。こゝでは輕く書物とか、殊に靑史とか解釋しておけばいゝでしよう。

その八、白熱燈

最も凝つた竹の使ひ方は、白熱電氣燈にあると思ひます。室內用の電氣燈で、在來の者は、その球が眞空になつてをつて、中に極めて細い炭素の線が入れてある。若し電流を通はす時は、此線が白熱せられて、光明を放つのです。其時炭素が燃えて無くならない樣に、球の中を初めから眞空にしてをきます。此炭素線を竹から製造する。併も孟宗竹から作るのです。未だ日本では出來ないから、日本の竹を亞米利加へ輸出して、そこで細くけづつて、蒸し燒きして、炭素線に變じて又日本へかへして貰ふ。やる時は一本せい〳〵三十錢か五十錢の者が、かへる時には幾百圓、幾千圓となつて來るのです。之位馬鹿らしい話が、現代日本の工業の程度では、他にやたらと例があるから嫌になるでしやう。

その九、竹の壽命

松は千年の壽と申しますが、實際拙者の見た者の中では、京の花園の妙心寺にあるのが一番太い。そうして其壽命は、立標に依つて勘定して見ますと、まだ三百年たらずでありました。なんでも四抱へか五抱へ位はあつたらうと思ふ。

竹は大抵三十年位で枯れる。松の實は結つてから熟する迄に、丁度二年かゝりますが、竹は又實がなると、親樹が乾度枯れて仕舞ふ。一體竹に限らず總て禾本科の植物は、結實すれば實を持つた地上莖丈は、枯れるのが規則です。けれ共地下莖は枯れないから、例へば臺灣あたりでは一度苅つた稻株から又芽が出て穗を結んだり又內地でも枯つくした竹藪から、更

に竹の子が萌して來るのです。竹に實がなるのは、飢饉年の兆だなどゝも申しますが、之は數十年月一度位、不作の年も來るといふ意味の巷說でしやう。竹はこの樣に、稻によく似た花をつけるけれ共、其雄蕊雌蕊等が甚だ不完全である爲に、發芽の能力を持つた實は殆ど出來る事がない。故に實がなつても、矢つ張り竹の子葉を見る譯には參りません。その代り竹は地下莖を以て盛に蕃殖し、延蔓して行くのです。萬葉集に「竹の根の根ばふ宮」とあるのは、この所を形容に使つたのです。（以下次號）

病とは何ぞや

ある一派の人は、世の中の事は何もそう揚子の尖で重箱の隅をほじくるやうな詮索をせずとも可い、何何とは何ぞや、扱てその理由、原因、結果は如何なぞと、やかましい事を言はずとも澤山である、柳は綠花は紅である、烏はカア〳〵雀はチウ〳〵と鳴く、その他別の仔細なし、學者共の彼此と面倒なことを云ふのは、全く戲論と申すもので、何の役にも立たぬもので御座ると云ふ人があります。これも場合に依ては誠に一理あることで、實際直接には役に立たぬ無用の研究も隨分あります。

敎育ある且賢明なる人も、病と云ふことに就ては矢張これに似寄つた意見を以て居る人が尠なくない。卽ち吾々は「病氣とは何ぞや」などゝ云ふ問題に頭を碎く必要はない、吾々は病氣であるか無いか、何時でも自分で感ずることが出來る、且健康で無い場合には、極微かのことでも、氣分が惡いとか、具合が惡いとか云ふ一種の感じがあり、些たりとも其處に階段があつて重いか輕いもと分かる、說明などを待たずして能く分かる話ではないかと云ふのであります。

併しこれは兎角二三世紀前の人の考で、科學と云ふものに稍や緣の遠い人の論法でありまして、今日の人は、この天然、この世界、この生活と云ふものは、

悉く我々の五官及び腦髓に關係を持て居るもので、あらゆる現象は勝手氣儘に雜然として起るものではなく、ちやんと一定の型にはまつて居るものであると云ふことを承知して居ります。尙ほ少し譯の分かつた人であれば、病氣の感じと病氣とは何時でも揃ふものではないと云ふことが分かる。例へば糖尿病とか、又種々の慢性の腎臟病と云ふ如き重大なる病氣に罹つても、本人は長い間少しもそれに氣が付かんで居る。何等自覺的の症狀としては無いのであります。又重い、とても癒らぬ精神病に罹つても病人自身では全く上機嫌のことが往々あります。それで病氣の何物であるかと云ふことを精密に確定することは、病氣を療治する上には極めて必要のことでこれが抑も治療法の根本になるのであります。

病氣と云ふものは、一種特別の者、所謂病魔と云ふ敵が居つて、それが人間の身體を襲ふのである、即ち疱瘡神、疫病神、風の神などが人を侵すのであると考へれば、御祈禱であらうが、御禁厭であらうが、下劑であらうが、針でも灸でも何でも構はぬ、その敵を身體から逐出しさへすれば宜敷いので其處には何の區別も無い譯であります、昔は學術的の醫學でも斯う云ふことを唱へたのでありますが、俗間では今日も矢張この流義が盛に行はれて居ります。これから見ますと、十九世紀の科學的醫學が、凡て此等の考を打破して、病氣の作用も、通常の生活作用も同樣の現象であると云ふことを明かにしたのは實に偉大なることゝ謂はなければならぬのであります。この考を最もよく發揮して今日の病理學を組織したのは數年前に亡くなりました獨逸のルードルフ、ウイルヒョウでありまして、この先生が始めて、病的の生活機能と通常の生活機能との異る點は、只それが過ぎて居るか、或は間違つた時に起るか、或は間違つた場所に起るかの違に過ぎない、即ち一口に云へば、何れの病氣でも、その雛形は皆通常の生活作用の中にあると云ふのであります。

これは大抵の病氣の場合に當てはめることが出來

る、玆には只二三の例を擧げて見ますならば、通常正規に血液が一定の路(血管)を通つて居る場合には、婦人は平均四十年位の間は(十五歳より五十三歳)四週間目毎に、子宮粘膜の血管から血が出るのが正常である、卽ち出血が起るのであります。これが一定度に止まり又規則正しく間を置いて來る間は、全く正常のものであつて、生理上必至の生活現象であります。が、若しこれが通常の量を超えるとか、或は滯るとか、又は時ならずして起る、卽ち普通の年齢よりも早く起るとか或は遲れるとか、若しくは不規則の間を置て起ると云ふことになれば、同じ作用ではあるが、これは病的の作用であります。これと同じく、その强さも、その出方も別に變りはないが、若し異つた部分より出血すれば矢張病的である、例へば鼻の粘膜や腸の粘膜から出れば、これは病的としなければならぬのであります。

又吾々の身體を造つて居る所の無數の細胞に於て、時として脂肪が少なくなつたり、時としては又非常に多くなることがあります。脂肪の著くのは、これは食物から出來するので普通何も病氣と云ふ譯のものではありませんが、扨てこれは度を失して多くなる。殊に通常は脂肪を含むで居ない筈の臟器に脂肪が附けば、これは細胞の働に狂が生じたので、彼の脂肪病と云ふものゝ如く高度になれば、勿論重症の新陳代謝機病と見做さなければならなくなるのであります。

身體の一部分が腫れたり、赤くなつたり、痛みが起つたりする場合に、これは蜂窠織炎であるとか、筋炎であるとか、凡て炎症或は焮衝と云ふ名の下に一括致しますが、この種の病氣の特徴とも云ふべきことは、白血球及び血液が、毛細管を通してその近傍の組織の内へ出ることであります。然し白血球が血管の外へ這ひ出したり血漿が滲出すと云ふことは、既に通常の場合に於ても諸種の臟器に於て、一定の時に行はれて居るのであります。特に胃や腸の粘膜に於て消化の最も盛になる時に、これを見るの

でありますが、これが過度になり不正の場所、不正の時に起れば茲に始めて病氣となるのであります。この事は啻に身體の病氣のみならず、所謂精神病に就ても云へることで、痛く悲むとか、大に悅ぶとか云ふことは、普通の感情生活の中のことでありまして、只その感情の發表の模樣とこれを促した誘因との釣合が取れて居る、所が鬱憂的精神障碍では、別にこれぞと云ふ誘因なくして起ることがあり、往々普通の悲哀から發して、その餘り長く續いたり、原因に比して度はづれて居るので始めて分かることがあります、而して此際別に判斷力や論理上の決意の能力が惡なつて居ると云ふ譯でもないが、只その鬱憂病の根本に成つて居る所の事實に關して思込み方が間違つて居ると云ふ所にあるのであります。例へばある母親が可愛い子供を亡くして非常に悲むと云ふ場合に、小兒の死んだのは自分が惡いからであるとし、それからして論理的に考へて來て自分の死を以てその罪を償はむとするが如きこれであります。

かうして見ますと、健康生活と病的生活との間には何等性質上の區別とては無い、この全く反對して居るやうに見える兩者の間には段々と移行があるだけのことであると云ふことが分かつて參ります。そこで病氣とは何ぞやと云ふことを解釋しやうと思へば、矢張ウイルヒョウ先生に從つて、變つた條件の下に行はれる生活、これ即ち病氣であると云はなければならぬのであります。

併し又斯くも說明することが出來ます。一體普通吾々の身體に於ては種々、その生活條件に變化が起る、この身體は所謂細胞と稱する單位より出來て居りますが、凡て活きて居る一個〳〵の細胞に於ても生活條件が變はる、而して分子、細胞、組織及器官と云ふやうに、總ての部分に於てその間に絕えず戰爭があつて、各個の原素は常に打死し、その中最も力の續くものが蹈み止まると云ふ譯であります。斯樣にして、この絕間なき戰爭の中に於て、最も存續する

に堪たるもの、即ち最も生存に適した部分で以て、只全體の均衡を保つて居ると云ふのが、先づ通常の、即ち生理的の生活であります。若しこの均衡が取れなくなると、吾々が病氣と稱する所の現象が起つて來るのであります。そこで又病氣とは生活作用の均衡の故障で、病氣が治癒と云ふことは、この均衡を持ち直ほしたことであるとも云へるのであります。かう申しますと、この方が解かり易いとか、學者らしい說のやうだとか云ふ考もありませうが、それは何れにしても、生きた內容を當はめれば善い譯であります。

茲にもう一つ注意すべきことは、學識に富むで居る醫學者は餘り云はずして、反て普通の人が大に力を入れて言ふ所でありますが、病的の生活機能を正しく判斷するには、各個人の平常の具合を能く知らなければ、とても出來ないことである、從つて吾々には健康の對絕的標準と云ふものは無い譯で、或人は尙ほ健康生活の範圍に在るが、又他の人では、これが既に病的であることもあり、又これと反對の場合もありませう。そこで又自覺的の病氣の感じを以て正當に判斷する譯にも參りません。正常と申しても、實は中庸を取ての話で、全く抽象的のことで、各個人の特性は顧みられないのであります。それでありますから、並はづれて居るからと云ふて、直ちに病的であるとは申されませんし、又これを判斷するのには、その人の平常の特質を知ると云ふことが是非必要のことなのであります。

例へば脈搏の數は大人では一分間に平均七十二として御座います、所が或人は五十五しかない、さうかと思ふと八十五も脈搏の數があつて、それで正常の人があります。これと同じやうに、その人その人に依て、他の器官の働きにも多少の差異がありまして、例へば腎臟の種々の病に由て、尿の中に蛋白質が出て來るものでありますが。この臟器に別に病氣が無くても蛋白が尿の中に出て來るやうなこともあるのであります。總て此等の例は、健康と病氣との移行

が何も際立つたものでなく、從て各個の場合に於て健康狀態を確かと判斷することの如何に困難なものがあるかと云ふことを示して居りますが、これが精神病になりますと、普通の身體の病氣よりも更に一層六ケ敷いのでありまして、これに由ても熟練したものゝ判斷と、素人の判斷とが時々大に相異することのあるのも分かる譯であります。これはその人の個人性、生來の特質の僅かに違つて來た所にも大なる意味があるので、家族の人々が餘程注意しても未だ病氣と云ふことに氣が付かぬのに、能く觀察する所の醫師の眼から見れば、既にその精神障碍の始であると云ふことが發見される。或人には全く通常の範圍にある精神の發表でも、或他の人に於ては既に頗る疑はしいものと思はなければならぬ場合があります。一體普通の狀態に於ても人の喜怒哀樂の情の表はれ方は甚だ樣々なものでありまして、大袈裟な悅び方をしても、又一向悲まないからと云ふても、それが別に病的と云ふ譯のものではない、つまりその人に取つての度合で、他の人では未だ正常の所までも行かないのに、その人には既に病的のことがあるのであります。

此等の例から考へますと、病氣と云ふことの解釋に、正しい、活きた意味を持たして、それを各個の場合に正當に應用すると云ふのには、如何に醫師の經驗と技術とを要するものであるかと云ふことがお解かりになるだらうと思ひます。

鼻感冒の話

醫學士　下平軍平

鼻感冒は氣候の温かい時でも、寒い時でも嫌なく起る病氣でありまして、無暗に水鼻汁が出て「ハンカチーフ」は數限りなく汚して誠にうるさいものであります、其で熱などはなく只嚏と鼻が塞りますのが普通であります。然し餘り長く續くものではありま

せんが好く神經質の人が罹ります。薔薇などの臭を嗅で起す人がありますし。又厩の臭で起ることがあります。又鐵道旅行をする時に必らず起す人があります。其原因は何であるかといふと、細微なものが呼吸する空氣に混合して鼻へ來て刺戟する故に起るものであらうと思はれます。西洋で餘程不思議に思はれて居るのは楓の花の咲く頃に此樣な病氣が多いことであります。又「ホストック」熱といふ病氣は矢張初夏の頃花が咲くとき花粉が鼻の中へ入りて起すものだと云ひます。其他吐根や「チヂタリス」など云ふ藥品を嗅ぐと起す人があります。

「ヒステリー」の病人や神經質の人は凡て外界の刺戟に感じ易い素因があるものだから些少の刺戟でも容易く變化を起すものであります。健康な人が嗅では愉快なる臭が反りて刺戟となることは薔薇感冒、蓮感冒香水感冒甚だしいのは咖啡木犀等で起るやうなのは其種類であります、其他數へて見ると食物や果物などの臭又味より起ることであります例へば、兎の燒肉芥子等が原因となるのであります然し我國の人は香又は味に就ては餘り委しく研究した人もありませんし、又特に香などに就ては趣味を持つ人が少なく從て餘り注意しませんから例へそう云ふ場合があつても何が起つたのか知らずに過してしまふことが多くあります。

以上述べた物は原因が外より來る事が知れて居りますが一見外より見え難い原因から起ることがあります。これは身體の一部分を例へば頭を冷したり、足を冷したり又腕を冷したりすると鼻感冒になることがあります。其他鼻腔の内に病氣があつて即ち鼻茸や肥厚性鼻炎があると常には慢性の病氣であるから氣附ないけれども何れ刺戟され易くなつて居るから一寸頭を下げるとか考へ事をするとか云ふ樣なとき血液が多く頭の方へ行くと工合が變てくるので急に起るのがあります、又精神興奮或は生殖器的興奮によりて起すこともある樣です、又或珍らしき例は梅干を見ると丁度口から酸い物見たとき唾の出るやうに

鼻汁の流れ出る人があります、これは矢張精神的興奮によつて起る例であります。

此病氣は素人でも直く知れる鼻腔に不快の感がして無色透明の水樣液が排出して。嚔が頻々出て來ると涙が亦流れ出します。眼瞼は腫れた樣な心地がし光線が眼に障はる樣な氣がしますから眼を半ば開き。全身に何となく不快な感がしますけれど決して熱は發することはありません。

嚔は反復發作して連發二十乃至五十回に及ぶことがあります。「モスレル」と云ふ人は八十時間に四萬八千回嚔をしたそうです。

鼻感冒は決して恐るべきものではありませんが又決して等閑にすべきものではありません。何故といふと度々此病氣に襲はるゝと鼻は益々刺戟され易くなり。寒暖或は空中の微細なる塵芥や細菌が附著し易くなる故に他の鼻の病氣の誘因となることが屢々ありますからであります。從て此治療もせねばなりませぬが病氣に罹れば既に遲い罹らぬ内に豫防せねばなりません。

豫防法は先づ第一に神經興奮性を弱くすることが必要であります。即ち體質を强壯にして少し位外來の刺戟があつても反應のない樣につまり神經衰弱を治療するのが大切であります。これは一般神經衰弱の療法と變りはありません。其他凡て抵抗の弱い所を鍛ふて起るものでありますから其抵抗を强くする樣に勉めねばなりませぬ。

一度起れば好く其原因を究めて例へば一局所を冷して起るなれば其所を冷水摩擦などで寒氣の爲め變化の起らぬ樣に常から心掛て置くに限ります。

其他の點に就ては斯道の專門家に相談した方が安全でありますから餘り素人療治をなさらぬ方が宜敷いやうに思はれます。

然しかゝる便宜のない人は止を得ませんから餘り鼻汁を力を入れて度々かまぬ樣にして何か身體を稍々勞する作業をなし勉めて血液を身體の頭の外の部分へ行く樣にすれば追々快復します。殊に婦人は下向

になつて仕事をする事が多い故如何しても頭を下にするから益々恢復せぬ樣になりますから左樣の時は家外の運動を試むる方が宜敷樣です。

其他臭塵芥などが原因となることが明白な時は勉めて是等を呼吸する場所に行かないやうにし、又左樣の臭を近づけぬ樣と心掛ねばなりませぬ。

我國でも近頃は繁々香水などが用ゐられて居りますが、此中に隨分斯樣な病氣の原因となつて居る所のものが少なくありません。只香水や香料でさへあれば結構なものとばかり思ふてゐるやうであります。がこれは大なる誤りであります。此生存競爭の烈しい世の中に勝を制しやうと云ふには勢身體を強壯にせねばなりませぬ。それにはかゝる些少の點にも注意をはらふ必要が是非あると私は思ひます。

因に記して置きますが近頃小兒の玩具として造花の種種の花が香を嗅ぐと必ず嚔が數回連發する物を賣て居りますが此等は矢張此病氣の原因となるものでありますから注意して玩しめぬ樣にせねばなりませぬ。

育兒

小兒保育の標準

小寺顯二郎

小兒鞠育の目的とする所は、身體も精神も完全に、健康に且つ端麗に成長させると云ふ所にあるのであります。この目的を達するには精神の保育即ち教育と云ふことの又必要なるは申迄もないことで、健全にして優秀なる精神的事業は、獨り健康なる身體に依て行はるゝと同じく、精神は又能く其身體を健康に且つ端麗ならしむるに與つて力あるものであります。

然らば身體の健全にして端麗なる人間とは如何なる人を指して云ふかと云ふ問が起りませうが、これは

迚も一定の標準を立てることは六ケ敷い。が併し人間と云ふものは徒らに繁殖するばかりでなく、能く發達するものであるとするならば、又只に文化の進むのみに止まらず、その精神も身體も共に向上發展すべきものであるとするならば、身體の保育の目的は倍々これを深めて行かなければならぬことゝ思はれます。實際醫學上の經驗に依つて見ますと、非常に注意して保護養育致します時には、迚も生活しさうな見込のない月足らずの子供であつても、隨分健康な立派な人間に育て上ぐることが出來るものであると云ふことを教へて居ります。誰でも少し氣をつけて觀察致しますならば、能く保護せられ、適當に榮養を受けた小兒は、假令生まれた時には少々弱い方であつたとしても、不注意に無茶苦茶な育て方をされた健康の小兒よりも反つて強壯な人に成るものであると云ふことが解かります。兎に角吾々は保護と榮養とに由て、精神並に身體の優秀なる人間を教養することが出來るものとすれば、これ又人間を新にし高尚にする所の一階段と謂ふべきもので、一代は一代よりこの目的に向て進んで行かなければならぬことゝ思ひますが、先ず差當りその遂し得べき所を明らかにして掛からなければなりません。

今日の所、完全の健康、完全の美とは抑も如何なるものを言ふかと云ふに、健康と云ふのは別に相撲取なぞのやうにゴツ／＼力瘤立つて居るのを云ふ譯ではない、つまり缺點や病が無く、總ての病氣に對して抵抗力強く、年齡に順じて老び行くのを申すのであります。

又美と云ふことも一定度までは健康と相一致するものでありますが、併し男の樣な腕や脛をして居るお孃樣は健康とは云へるかも知れませんが、迚も美であるとは云へない。又小兒の身體の美であると云へるのは、唯だその年齡に相應じその男女性に從つて能く調和し釣合が取れて居る場合でありまして、この健康と美との二ツのものは、已に身體外部の格好と、その發育も具合に依て表はされて居ります。

先づ小兒の裸で取つた寫眞を澤山集めて較べて御覧になりますと、各年齢に依て、頭、その頭蓋の大さ、眼の大いさ、格好、手足の釣合、表情の具合などが各〻異つて居りまして、その年月に順じてそれ相應の一定の釣合、一定の割合のあるものであることが御解かりになります。一寸見て、この兒は何歳位であるかと云ふ見當の略ぼつきますのは、つまりこれに出るのであります。その身體部分の割合を調べて見ますと、初生兒の身體では、頭即ち首から上だけで以て軀幹全體の四分の一を占めて居る。即ち胴と脚とを一緒にしても頭の三倍しかない。非常に頭の大きなものであります。大人では頭は身長の八分の一しかない。若し假に大人の身長が頭の四倍しかないとして御覧なさい。隨分妙なもので、全く福助と云ふやうな格好になります。かう云ふ風に四肢軀幹の頭に對する割合などは凡てその發育に從つて段々變つて行くものであります。

然しこの身體の格好の變化は、何れの年齢に於ても同じやうに變化して行くのでは御座いません。發育する時とそれが一時止まる時と、代番になつて行くものでありまして、この身體外部の格好が定期的に發育して參りますから、これが已にその子供の健康と美さを卜するに足る所の大事な物指になつて居るのであります。病氣のあるもの、又は何處ぞ缺けた所のある人間は、その外貌も亦尋常には發達して參りません。この身體外部の形の發達變化は、身長に於て先づ最も著しく表はれます。

出來得るだけ立派な人間を育て上げやうと云ふ理想の目的には、完全無缺の模範的の人間を以て普通の標準と見做すべきであります。これには遺憾ながら人種では西洋人、その中でも北方の餘り人種の混合してゐない白哲人種を舉げて、先づ體格の標準と見做さければなりますまいが、これに就て西洋の學者が作つた表を一つ二つ左に掲げて御參考に供しませう。

小兒身長發育法(センチメートル)

年齢	ランケ氏理想的身長 男	性各年増加	女	性各年増加	ストラッツ氏正常身長 男	女	各年増加 男	女
〇	四九・五	〇	四九・五	〇	五〇		〇	
一	七三	二三・五	七三	二三・五	七五		二五	
二	八三・一	一〇・一	八三・一	一〇・一	八五		一〇	
三	九一・五	八・四	九一・三	八・二	九三		八	
四	九九	七・五	九八・七	七・四	九七		五	
五	一〇五・四	六・四	一〇五・〇	六・三	一〇三		六	
六	一一二・二	五・八	一一〇・七	五・七	一一一		八	
七	一一六・五	五・三	一一六・〇	五・三	一二一		一〇	
八	一二一・五	五・〇	一二〇・九	五・〇	一二五		四	
九	一二六・二	四・七	一二五・六	四・七	一二八		七	
十	一三〇・七	四・五	一三〇・〇	四・四	一三〇		二	
十一	一三五・〇	四・三	一三四・六	四・六	一三五	一三八	五	八
十二	一三九・二	四・二	一四〇・三	五・七	一四〇	一四三	五	五
十三	一四三・八	四・六	一四七・六	七・三	一四六	一五五	六	三
十四	一四九・七	五・九	一五三・八	六・二	一五一	一五八	五	三
十五	一五六・七	七・〇	一五七・三	三・五	一六〇	一六〇	九	二
十六	一六三・五	六・八	一五九・〇	一・七	一六二	一六二	二	二
十七	一六七・六	四・二	一五九・七	〇・七	一六五	一六三	二	一
十八	一六九・四	一・八	一五九・九	〇・二	一七〇	一六五	五	二
十九	一六九・九	〇・五	一六〇	〇・一	一七五	一六八	五	三
二十	一七〇・	〇・一	―	―	一八〇	一七〇	五	二

普通の體量、體重の發育も略ば身長の發育に似寄つた割合には增して參りますが、その理想的の數を割出すことは餘程六ケ敷い、身長のやうな譯には參りません、と云ふのは體重と云ふものは御承知の如く、病氣すれば無論のことでありますが、種々の事柄に由て容易に變化するからであります。併し今比較的信用するに足る一二の表を掲げて見ませう。

小兒の體量(體重)發育表

一 カメレル氏による

年齢	童男	少女
〇	三三七〇	三一六〇
一	一〇三一〇	九四六〇
二	一三二一〇	一二〇一〇
三	一五四六〇	一三九二〇
四	一六八一〇	一五七二〇

二 ニコーヂルマン氏による

年齢	童男	少女
九	二六八九〇	
一〇	二八三一〇	
一一	三〇七五〇	
一二	三三九四〇	
一三	三五八〇〇	

五	一九三〇〇	一七五四〇	一四	四一〇一〇
			一五	四五九五〇
			一六	五一九三〇
			一七	五六八七〇

これは種々の子供の平均を取つたのでありますが、眞に健康で身體の立派な發育を遂げた小兒だけの體量の增し方を精密に測つた表は一寸得難いのでありますから、育兒に熱心な方は、御自分の立派な小供衆の發育に就て測つて見て頂き度いものであります。

何れの表を見ましても最少の相異はありますが、先づ第一年の哺兒時期には大凡五〇センチメートルから七十三センチメートルに進み、第二年には八十三センチメートル位迄增せば上等の發育で、尚ほ女の子は小兒時期の始の間は殆ど男の子と同じ樣に發育して參ります。差があつても僅に〇・六から一センチメートル位の差でありますけれども、段々男と女とのけぢめが著しくなつて來て小兒期の終頃になりますと身長の增し方も亦大分變つて參ります。女の子の體重の增し方は、初めは矢張男の子と同じ調子でありますが、漸く十歳頃に至りますと急に男の子を追越して體量が殖えて參ります、而して生殖機能の成熟期に這入りました後は、今や春氣發動期に在る男の子の體量に又追越されてしまふのであります。

身長が延び、體量が殖えて發育して行きますのは、單に大きくなり、肉が著くと云ふだけのことではない、一體にその形が變化して行くのでありまして、それは一部分は身體各部の位置、狀態に由り、又臟器の構造に變化はなくとも、その機能が變つて來ると云ふことも關係して居るのであります。これ等の變化の具合は、各年齢に於ける身體の割合を圖に表はして比較して見れば、餘程面白く解かるのでありますが、今日はその圖を入れることが出來なかつたので殘念です。

男女の間の區別は八九歳頃迄は餘り分りませんが、

これから段々成長するに從つて、女の子に於ては著しく身體に圓味がついて、腰の所が發育し、その胸と漸次女子の特徵を現はして參ります、男の子では、その男子たる姿が完成するのは、もつとこれよりも後のことであります。

身體が延び、體格が殖え、姿が變化するが、單にそれだけのことを以て健全なる身體發育の證據とする譯には參りません。健康の小兒には、凡てその年齡特有の性質が具はつて居るもので、これが又その健全、端麗を表して居るのであります。今大體小兒の特質とも云ふべき點を擧げて見れば

一、頭、特に腦頭蓋が身體の割合に大きく、四肢が大人に比して短かいこと

二、眼が大きくて光輝あること

三、皮膚と髮の毛がつや／＼しく柔かな色澤を帶びて居ること

四、皮膚筋肉が彈力に富で滑かに張り詰めて居ること

五、身體に毛が生えて居たり著しく邪魔になる脂肪沈著などの無いこと

六、顏面の運動が表情に富み、凡て運動の活潑なること

七、骨、筋肉等の運動器官より、內部の幽微なる構造に至るまで總て器官の機能の旺盛なること

併しこの機能が盛であると云ふことも矢張一定の時期があつて進んで行くのであります。即ち生れたばかりの哺乳兒は、とても秩序ある確かりした運動は出來ない、少なくとも隨意の運動は出來ません。手を握ることも最初は極めて不確であるが段々しつかり握るやうになる。半年も經てば、やがてどうやら坐ることを覺え、一年の終には起ち、次で間もなく步き初め、それから段々足どりが確かりして來て、一年を過ぎて後には兎も角も續けて步けるやうになります。

腦髓は小兒期の前半、所謂髫髮子の頭に、大概その容量の發育を終るものでありまして、初生兒の時に

大約三百八十瓦あるとすれば十歳迄には千三百瓦或はも少し多くなり、それからと云ふものは只僅かしか増さないものであります。

五歳迄は心臓の尖の所が、第六肋間の部分で、乳嘴を通して眞直に引いた所謂乳線より、外の方で搏動して居りますが、十三歳から十五歳、即ち小兒期の終頃になりますと、これが所定の場所（第五肋間、乳腺の内方）で搏つやうになります。

然し小兒時期に於て最も重要なる變化起るのは消化器で、初生兒に於きましては、元來只、唯一の榮養品、即ちその母の乳を消化するだけに出來て居るのでありますが、一年程經ちますと、漸く他の食物も少々は生理的に、自然に消化することが出來るやうになつて參ります。而して第二小兒期、即ち六七歳頃に至りますと、乳歯が落ちて丈夫な永久歯がこれに代ります、斯うなれば初めて消化器が大人同樣の食物に堪へるやうになつた標徴であります。

こゝには迚も精細の點迄申上げる譯には參りませんが、今右に述たやうな誰が見ても分かる著明の變化が、一定の時期、一定の段落を以て起るとすれば、其他の總ての器官に於ても幽微なる樣々の變化が行はれるものであると云ふことがお解りなるだらうと思ひます。

斯樣にして、その年齢に相應し、發育も尋常で、身體の働に故障なく、氣病に對しても十分抵抗力があれば、これは健全の證據であります。併しその健全ならざる所があつても、素人には往々解からぬ所があり、又所謂親の慾目贔屓目と云ふものがあつてその不健全の發育に氣の付かぬ場合もありますけれども、大體右に述べた尋常の發育標準に照して見ればその如何は解かる筈で、何處ぞ不健全の所があれば全體の身體の樣子に表はれ、又その智慧のつき方、機嫌の好惡しにも現はれるものであります。

これで以て健康、小兒の健全なる發育とは如何なるものを云ふか、吾々に天より委嘱されたる愛子を保育する上に於て、その身體的發育の標準を何處邊に

治かなければならぬかと云ふことも明かになりましたが、然しこの目的を達し得るにも一定の制限がありまして、なか〳〵思ふやうには行かぬものであります。獨逸の哲學者のショーペンハウエルと云ふ人が、如何にして、ある人物が自然に起るかと云ふにこれは總て如何なる父に依て、如何なる母に生まれたか、尚ほ如何なる時に生れたかと云ふことに歸著すると申しました。尤も遺傳の法則と云ふものは、今日の所ではまだ〳〵不明の點が澤山ありますけれども、併し或病氣は、例へば黴毒、結核と云ふやうなものは、多少に拘らず、その子孫の健康に影響を及ぼすものであると云ふことは吾々の知つて居る所であります。單に外貌のみならず、小兒の健康そのものが血統、家族、人種に依て相異があります、それでありますから、前に申述べた理想的標準に吾々の小兒を當篏めるに就きましても、この根本的條件を顧みなければならぬのであります。

尚ほ經驗上、社會及び家庭の狀況は、その中に成長する所の小兒の發達、健康及び疾病の上に影響を及ぼすものでありますから、吾々が小兒の健康發育を論ずるには、是非この事を顧みなければならぬのであります。又個人的の關係、或は物質的の關係、種々の義理、その他の事情の爲に、その子孫の爲には豫め危險があると云ふことが分かつて居ながら、止むを得ず結婚しなければならぬと云ふやうなこともあつて、良心はありながらも、この社會的、家族的の悪影響を避け得ぬ場合もなか〳〵多いのであります。

最後に小兒が完全に發育を遂ぐる迄の間には、病氣であるとか、その他種々樣々の危險が横はつて居りまして、その希望するが如き理想的の人間を育て上げることが出來るものであらうかと疑はれる程であります。

今日の小兒治療學では、幾多の危險を免れしむることが出來る、又小兒の生活法に十分注意するならば隨分その健康を防護することが出來る、尚ほ以前は

小兒の生命を奪ふた所のヂフテリー、又哺乳兒の諸種の榮養障碍の如きものも、今日では迅速確實に治癒することの出來るやうになつたものも多いのでありますが、然し全然これを免れ、又は少しも小兒の健康を害さぬやうに治癒することが出來るかと云ふと、これは迚も出來ることでない。醫者は魔法使ではない、寧ろ自然力の使はし人、手傳人たるに過ぎぬのであります、自然はとてもこれを枉げたり矯めたりする譯には參りませんが、併しこれを利用し應用することが出來るのであります。

それで無病健全容姿端麗の子孫を養育して、この目的を妨げる所の諸種の危害を防ぐのには、保護、榮養、萬般の事柄、その發育の時期に從て、それ〳〵の注意が要るのであります、併しそれは今こゝに申述ぶる譯には參りませんから、又々章を改めてお話致し度いと存じます。

小兒の眼

構造及び發育

小兒の眼と大人の眼とでは大分異つて居る所があります。先づ小兒の眼は大人の眼よりも小さいと云ふことは、これは申す迄もないことでありますが、併しこれをその身體の割合から申しますと小兒の眼は著しく大きいものであります、これは大人の眼の長さと小兒の眼の長さとを各その身體の割合にして見れば分かることで、大人の眼の長さは平均二十四ミリメートルとすれば、小兒は赤坊のくせに平均十七・五ミリメートルもある。

かうして見ると初生兒の眼は比較的大きなものであります。尚ほ委しく測つて見ますと、赤坊の眼は、球の如く丸いものではない、大人の眼もそうでありますけれども、赤坊の眼は、縦も横も長さも不平均で餘程いびつなものであります、而してこれが種々の方向に種々の割合の早さで發育致しまして、一時

は頗る球形に近い形になることがあります、これは先づ凡そ九歲頃迄のことで、これから後になりますと、再び横縱の寸法が違つて來まして、眼球固有の形に近づき、縱の方向に稍や扁平になります。眼の最も盛に發育致しますのは、凡そ四歲頃までゞ、それからと云ふものは平等に緩慢に發育して最後の大さに達するのでありますが、その發育の終りは、矢張全身の發育の止まりと一致して居るやうに思はれます、卽ち通常二十五歲迄を申しますが、その頃までに發育が完成するものと思はれる。

殊に赤坊の眼の大さ、その發育の割合は、腦の大さ及びその發育の割合に餘程よく似て居ります。

初生兒の眼の大さと大人の眼の大さとの割合は、眼球の前部に於ては餘り差が無い、卽ち初生兒の眼の角膜、所謂黑玉の部分は大人と變りが無い（高さ十一ミリメートルに對する十ミリメートル）只初生兒の角膜は大人のものよりも僅かに凹味が强いだけであります。斯樣に初生兒の眼球の前部が幅が廣く眼の長さの十七ミリメートルもある所から、その屈折狀態を想像して見ますと、初生兒の眼と云ふものは餘程遠視である、卽ち並行に來る光線が丁度網膜の上で一致せずに、それよりも遙かに後の方で一致するものと考へられる、併し非常に注意して計つて見た成績に據れば、初生兒の眼は遠視狀態ではあるけれども、その度は比較的輕度のものであります。

初生兒の虹彩、卽ち碧眼であるとか、黑眼乃至茶眼であるとか云ふ所の、彼の瞳孔を作つて居る所の膜は大概やゝ灰色を帶びた黑い色をして居りまして、至つてぼんやりしたものであります。その固有の色は二歲になつて漸く出來るので、これは生れたばかりの時にはまだ無かつた所の色素が、虹彩の組織の中に發育して來るに由るのであります。

それから瞳孔はどうかと申しますと、初生兒に於きましては、比較的小さい、卽ち直徑二・五乃至三ミリメントル位であります。これが六歲頃迄は段々少しづゝ大きくなりまして、一生涯の中で一番瞳孔の

廣い時になりまして、それから二十歳までは同じ狀態であります。これから後になりますと、五十歳乃至六十歳位迄は復び段々瞳孔が小さくなつて參りまして、終には初生兒の瞳孔よりも、も少し小さくなるものであります。

次に光の明暗に對する瞳孔の運動、卽ち明るければ小さくなり暗くなれば大きくなるその働は、初生兒に於ても略ぼ完全に大人の如く行はれますが、只明りが暗くなる際に十分大人の如くは瞳孔が廣がりません、併し幼年者は槪して、老年者よりも、その瞳孔の運動が遙かに活潑で且つ十分に行はれるものであります。

又器械に依て眼球の內部を照して見ますと、初生兒の眼は頗る鮮かに明かな色をして居ります、これはつまり脈絡膜と云ふて、大變血管や色素に富んで居る膜がありますが、その脈絡膜の組織に色素と云ふものが殆と無い、これは一歳以上にならなければ發生しないからであります。又網膜と云ふものも生れたばかりの時は、その構造が餘程違つて居りまして特に、網膜の最も能く視える部分がまだ不完全で、生後四週間に著しく變化するものであります、視神經と云ふものも不完全であります。

視力の發展

斯の如く初生兒の眼は、その構造がまだ完成しては居りませんけれども、それでも既に光は感ずるので明るいと暗いとの區別はつくのであります。而して第一日目には多少羞明がります、特に目を醒ました時又暫く暗い所に居つた後に羞明がるのを認ます。既に二三日經ちますと羞明がるのが止むで、反對に適度の明りを喜ぶやうに見えます。併し初の十日位の間に時々光の方に頭を向けることがありますけれども、これは物を見る爲に隨意に顏を其方に向けるものとは申されません、漸く二十日も經ちますと、小兒は初めて明るい面に對して目を向け、時々一方から一方へ頭を廻はすやうになり、三十日後になれば既に光ある物體の動くのに從つて目を移します。

やがて三個月の終頃になりますと、目を一定の方向に向けて、その物に目を止めることが出來るやうになり、何ぞ注意を喚起す物を求めて、それに目をつけるやうになります、これからと云ふものは、小兒は目が醒めて機嫌の好い時には、絕えず眼を以て物を眺め初めるのであります。

眼球運動

眼の運動は、初めの一週間に於てはまだ不整である即ち兩方の眼が規則正しく、同じ調子に。同じ程に動かない。時として極小さな赤坊が、兩方の眼を同じ調子に、對稱的に揃へて動かすのを見ることがありますけれども、これは寧ろ偶然のことであります。通常その目を醒まして居る時、殊に眠つて居る時に見ますと、この時には往々半分眼を開いて居りますが、その眼球は種々の方向に不正に運動して、屢々斜視のやうな目つきをすることがあります。特に兩方の眼をひどく内側に寄せることがありますので、まだ若いお母様方は往々この子は斜視ではないかと云ふて心配することがあるものであります。併しこの不整な眼の運動は、第二個月目になりますと、もう稀になりまして、第三個月になりますれば、前にも申した通り自ら物を見始めるやうになりまして、眼の發育が著ければ、最早斯樣な運動を致しません或は只稀に認むる位のものであります。これからして物を視る力が發育し、腦の光を感ずる部分の機能に故障なく、眼を動かす筋肉も正しく働くと云ふことが分かるのであります。眼の運動とても別に手足の運動と變りはない、赤坊が物を持つたり歩いたりするのに、その稽古初は誠に覺束ない、下手な運動を致しますが、これを怪しまないとすれば、これよりも遙に複雜て居る眼の運動が最初からうまく行かないと云ふのは寧ろ當然のことであります。

眼瞼運動

眼瞼の運動も亦生れたばかりの時は不規則で不整なものであります。初生兒は大概眼を閉ぢて居りますが、若し開く時には、左右の眼瞼の運動が揃ひませ

ん、即ち一方の眼は開いて一方の眼は閉ぢて居るとか或は一部分開くとか云ふ風であります、この眼の開き方の不整は大概第二個月には止みます。尚ほ可笑いのは、眼瞼の運動が、眼球の運動に伴はないことでありまして、眼球を下に向ける時に上眼瞼が下らず、眼球が上の方に向ふ時に眼瞼が上がらぬ、加之往々全く反對に運動することがある、即ち眼球が強く下の方に向く時に、眼瞼は上の方に擧り、或は反對に眼球が上に向ふ時に反て眼瞼が下がると云ふやりな運動を見ることがあります。眼球の運動と眼瞼の運動とが共働するやうになるのは凡そ三個月位からのことであります。

この他一寸附加へてお話致しますが、或人の觀察によれば、赤坊は眼を廣く開くのは、その愉快の情を表はし、眼を閉ぢ或は堅くしめるのは不快の感を示すのであると云ふことであります。

又或學者の研究に依りますと、既に初生兒の眼に於ても多少大人の眼に於けるが如き調節とか輻湊とか云ふやうな込入つた機能が現はれると云ふことでありますが、併しこれは全く反射的の作用で、この不完全な不隨意的の働から漸次巧妙なる意識的にして精密なる調節機能を呈するに至るのは、なか／＼單純なものではない、これには幾多の經驗と物を考へる力が、結付かなければ出來ないのであります。調節機能は既に十分になつて、即ち小兒は種々の距離に在る物を隨意に精密に視ることが出來るやうになつても、尚ほその物體の隔たりを判定することは出來ません、即ちまだ月を捕へやうとする有樣でありまして、視ゆる物の距離や大さを測り知ることの出來る迄には餘程手間の要ることで、これは他の官能特に觸覺、筋肉感覺等の助けに依て得た所の感覺や經驗を應用し互に結付けて段々覺え込まなければならぬのであります。

種々の試驗に據て見ますと、この眼で以て物の距離や大さを計り知ることは、三歳になつても極めて不完全で、五歳乃至六歳に至ても、尚ほ頗る不確實で

少し遠い所に在る物體の大さに就ては間違つて見るものであると云ふことであります。

次に小兒の眼が種々の波長の光線、即ち色と云ふものに由て起される所の感覺を初めて能く分かつのは何時頃であるかと云ふことを確定するのは大分六ケ敷いことでありまして兎に角色と云ふものは最初はその色として視えるのではない、只種々の度合の明るさに感ずるのであります。

又色を見分ける能力の完成するのは、その人々に依て異るものでありまして、既に二歳の終頃には殆ど總ての色を確實に區別する小兒もありますが、又六歳位になつても甚だ不確實な小兒もあります、尤もこれはその練習をするとしないとに依て大に差異があることゝ思はれます。

（以下次號）

家庭衛生

看病の功徳

昔は病人があつても今日の如き治療看護を受けることは出來なかつた、先づ見殺しにしたのであります、特に傳染病、流行病などが始まれば、病人は皆外に棄て、活き殘つたものは遠く山野に逃れて漸く命脈を繋いだ、實際これが爲に絶滅してしまつた人種もある、これ等の事は古き歴史を見れば何れの國も同じ事で、我邦に於ても中古の物語などを見れば、その當時の慘澹たる有様が察せられます。これ皆醫學、衛生の道が開けなかつたからである。併し昔と云ふても、生命を惜み、人の苦痛を憐れむの情は別に變がない、何とかして人の病苦を救はんと出來るだけの工夫と出來るだけの力を盡したに相違ない、禁厭

と云ふが如きものもこれが爲に出來たのであります。

醫術及び看病法と云ふものは、全くこの慈悲憐愍の情より發達進歩して來たものでありまして、何處迄もこれが土臺となつて居る。今日では看護婦と云ふ一種の職業が出來て、病院又は家庭に於ても病人のある時には非常に大切な勤を致して居ります。これは婦人に取ては誠に適當な仕事であると思ふ。婦人は悉く看護婦になれとは申しませんが、併し我邦の男子は悉く兵役に就く義務がありとすれば、我邦の婦人は又悉く看護に從事する覺悟があつて然るべきであらうと存じます。

昔は武士としての修養には是非劍術が必要であつた。これは決して人を切殺すことだけの修業ではない、文武兩道を兼備した完全なる武士となるには、直接間接にこの劍術と云ふものは、この精神並に身體の上に偉大なる影響があつたからであります。又婦人は音樂、茶道、插花等の稽古の外に、嫁入するのには多少按摩をも練習したと云ふことでありますが、私は所謂この按摩を練習した、その心持を今日の看護法練習に引直し向上させたいのであります。彼の竹刀や木劍を振廻はすのは、今日では誠に馬鹿げた事のやうでありますけれども、矢張男子の身體並に精神を鍛錬へる上に於て種々の功があるのであります。看護法もさうである、病人の出來た場合には病院に入院させる、或はいくらでも看護婦を傭ふから宜敷いと云はるゝかも知れませんが、決してさうでない、第一急病人が出來た時にどうするか、看護婦どころではない、醫者も藥店も近所に無い場合が屢々ある、斯る時に、ぬからず適當の手當を施し、その處置の宜しきを得ることは、是非看護學の心得がなければ出來ぬことであります。然しこの看病と云ふことは、單に斯樣な實際上の役に立つばかりでなく、男子が擊劍、柔道などに由て、その男子たるべき精神氣慨の鍛錬をすると同樣に、女子の女子たる美德を修養して行く上に大なる效果ある

ものと思ふのであります。

先づ第一に、看病には何よりも慈悲心が必要である、人を愛し、人を憐むと云ふ情が深くなければならぬ、これが缺けて居る人はとても看病者たる資格が無い。次に身體が健全でなければならぬ、看病するには、隨分骨が折れる、往々夜も寢ないで病人の世話をしなければならぬ、或は危險な傳染病患者を取扱ふこともある、此等の事に克く堪へ得て其勤を全うするのには是非自ら健康でなければならぬ。尙ほ眼や耳が不完全では、とても病狀を十分に觀察することは出來ない、又精神の鈍い人間でも勤まらない、兎に角身心の健全と云ふことが、看病者に必要の條件であります。次に忍耐と云ふことが又極めて看病者に必要のことである。一體病氣に罹つて居る人は、氣が六ケしくなる。隨分我儘氣儘なことを云ふて、家族の人々も殆ど持餘すやうな病人も少なくない、これを巧みに病人を怒らさずに取扱つて行くのには、餘程我慢し忍耐し、常に自分の職務の何事であるかと云ふことを忘れずに辛抱して行かなければなりません。又看病者は謙遜で且つ從順でなければならぬ。何故ならば看病者は、醫師の助手として働くのであるから、自分が治療者の位置に立つて、醫師のすべき事を自ら試みたり、或は醫師の云ふことを守らず、反て病人の前でそて主治醫の惡口、又はその治療法の批評などをするやうなことではならぬ。

尙ほ敏捷でなければならぬ。治療、殊に外科的手術の手傳をする時などには、ぐつ／＼したり、まご／＼したりする者では役に立ちません。と云ふて輕卒な、ひよこ／＼した人間では更に危險である。沈着で且つ機敏なるを要するのであります、これには性質もありますけれども、一つは熟練、經驗に依るのであります。

この外、容貌と云ふことが、大に關係する、餘り甚しく醜い容貌をして居るものは看病に適しない。神經の過敏になり刺戟され易くなつて居る病人は、

不快な面をして居る人をひどく嫌ふことが多い、あながち美人でなければならぬと云ふ譯では無いが、常に温和な快潤な容貌が必要である、これは心の持ちやうで、努めれば随分出來ることであります。以上は理想的の看護婦、看病人として最も大切な性質、要件の大體を擧げたのでありますが、之を以て觀る時は、理想的の看護婦は又直ちに理想的の婦人と云ふても差支がなからうと思ひます。普通嫁の選擇をする時にもこの位揃つて居れば澤山でありませう。それで私は婦德修養の一法として、何れの御婦人方も一通り看護法を心得られて、機會のある毎に、この心持で應用されむことを切に希望するのであります。佛語にも七福田中看病は最良の福田であると云ふやうなことがありまして、功德となることも種々あるが、その中でも看病と云ふものは最も良い功德であると云ふのでありませう。次號より看護法が掲載される筈になつて居りますので、今日は看護の功德と云ふことを一寸申上げた次第であります。

身體の洗濯（承前）

九、消化器の洗濯

消化器と云へば口から始まりであるが、口の洗濯は前に述べてしまつたから、今日は胃と腸の洗濯をお話することにする。

口から胃に行く迄には食道と云ふ長い管がある、この管も時々洗濯をすることがある。これは如何なる場合かと云ふと、食道の一部は故障が起つて、その部分が狹くなりて、其處に食物が閊へることがある、又食道の一部分が膨れ出して、其處に食物の溜ることがある、さうすると、それが腐敗しかけて益々病狀を惡くする、又斯樣になつて居れば、自然粘液が多くなつたり、他の病氣が著いたりするので、から云ふ時に食道の洗濯が必要になつて來るのである。

この洗濯は無論醫者でなければ出來ないのであるが、これには可成太い護謨の管で、その先は球にな

つて居るものを食道に插込むで、外から空氣を送ると、その球が膨れて、食道を塞ぐ、からして水が胃の方へ流れて行かぬやうにし、それからもう一本その上に附屬して居る管には硝子の漏斗を取附けて、これから水或は藥液を流し込み、その漏斗を擧げたり下げたりして食道の內を洗ふのである。

次に胃もこれと同じやうな仕掛けで以て洗滌する、この胃の洗滌法は、なか〳〵效能のあるもので、如何なる場合に用うるかと云ふと、先づ第一に何か毒物、或は胃腸を害するやうなものゝ誤つて飮むだ時などには、直樣この仕掛で以て洗ひ出してしまへば生命が助かる。つまり嘔吐のと同じことであるが、指を咽頭に入れたり、鳥の羽を入れて刺戟して出すよりも、苦しまずに且つ完全に出してしまふことが出來るのである。酒を飮過ぎて急性の中毒に罹る、卽ち甚しく醉ばらつた時などにも、その胃袋を洗へば、大抵本性がつく。その外胃が擴がつて消化機能が惡くなり、腸の方に物を送る働が惡くなり、內の食物が醱酵したり、腐敗しかけるやうな病氣の時には、この方法で洗滌して效がある。尙ほ慢性の胃病で、胃の分泌作用に狂が生じ、鹽酸が多く出來過ぎて、胸がやけたり、噯氣が出たり、酸い水を吐くやうな場合には殊に適當の療治であるが、これ亦醫者でなければ六ケ敷い、少なくとも醫師を監督の下に行はなければならぬ、但しこれは慣れると云ふと自分でも容易に出來るやうになる。卽ち護謨の管を太い饂飩でも嚥みこむつもりで、そろ〳〵呑むでやる、而して胃に屆いた時分に洗滌液を流し込むで、能く胃の內を洗ひ出すのである、これは慢性胃病の人に屢〻見る所である。無論妄りに用うべきことではない。

次には腸の洗滌である。胃も腸も健康であれば自然に掃除が出來る、卽ち胃の內の物は消化するに從つて漸次腸の方へ送られ、腸の內に來た物も消化され吸收されながら段々下の方へ〳〵と送り出されて、滯るやうなことがない。所が腸の機能が鈍くなる

と三日も四日も便祕して外に出されない、腹が苦しくなる、頭痛がすると云ふやうな樣々な症狀が起つて來る。斯樣の場合には、果物類を多く食し、適當の運動をし・或は按腹を試み、又は下劑を用うるも腸の洗濯の一手段である。然しまた下の方から直接に腸を洗濯することがある。即ち灌腸法である。この灌腸と云るものは醫術上種々の場合に應用せらるゝもので、普通便祕して居る場合に用うるは無論のことであるが、單に排便の目的に用うるばかりでなく、全く腸を洗濯する目的で行ふこともある。但し小腸と云ふ部分までは洗ふことは出來ないけれども、其下の大腸と云ふ部分迄は略ぼ洗濯がきく。併し斯樣な大洗濯は、その病氣次第で醫者が行ふべきものであるから、それは略して、袖口或は襟の洗濯とも云ふべき、直腸の灌腸法に就て一言して置かうと思ふ。**これは自分で行ふことが出來る。**又家庭に於て必要のことで、殊に子供がある家では是非心得て置かなければならぬ、子供の病氣の時に醫師の往診を依賴すると、往々灌腸をして御覧なさいとか、灌腸をして被下とか云ふことがある、尤もその時には醫師は灌腸の仕方、それに用ふる藥液のことに就て注意はある筈であるが、小さな赤坊の便祕して居る時には・紙裂繕にグリセリンをつけて肛門を插したゞけでも能く排便するものである。普通は只の冷水でも宜敷しいが、又石鹼を溶かして用ふることもあり、食鹽水を使ふこともあり、其他種々の收斂劑、消毒藥などを用うることもある。藥液を用うるには醫師の處方に依らなければならぬけれども石鹼水や食鹽水は別に危險はない、イルリガートルに入れて、その嘴管にワゼリンのやうな油をつけて靜に肛門の中に入れて、そのイルリガートルを高くすれば、それで宜い、この際口を開けば肛門が多少緩むものである。又グリセリン灌腸器で一瓦乃至三瓦のグリセリンを注ぎ込むでも宜しい、而して便意が起つても可成こらへて暫く經つて排便するやうにする、但し肛門に痔などのある場合には濫に灌腸

しては益々悪くするからこれは氣をつけなければならぬ。最後に小兒が便をして後には、よくその尻を湯で洗つてやるとは望ましいことである。又灌腸をするとと癖になつて灌腸でなければ出ないと云ふことを屢々聞くが、そんなことはない。寧ろ便秘する本の病が治らないのである。



質疑

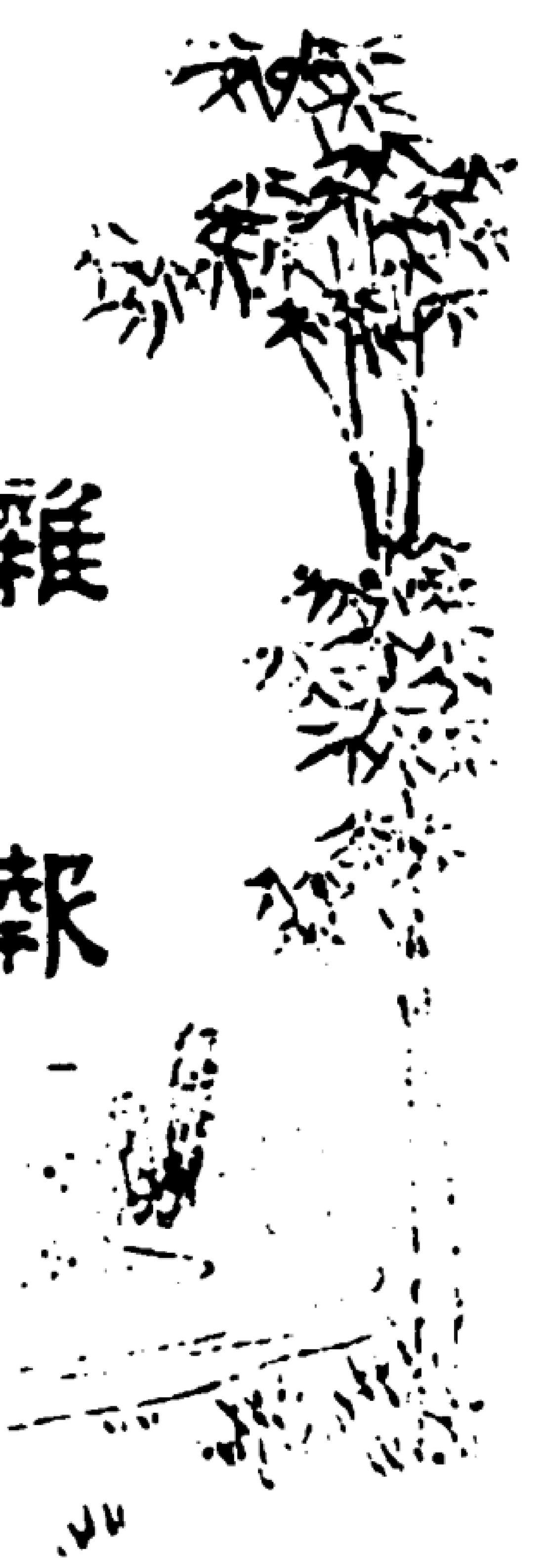
問・（前略）近頃發明されたる結核注射藥は如何なる結核にても全治するやう聞及び候が、實際效能あるものに候や又何回位注射すれば宜しきものにや御面倒ながら最近御發行の婦人衞生雜誌上に御示し被下度御願申上候　愛知　（非、さ、）

答・近頃發明の結核注射藥と云ふのは、最新ツベルクリンと云ふ藥でせうが、これに類似のものは數十種もあります、而して其效能のあることは二十年も昔に發明された時から同じです、只種々の改良を經て幾分か毒が少なくなつただけのことです、如何なる結核でも全治すると云ふことは虛言です、少なくとも誇張の言方です、何回注射すれば宜しいかと云ふことは、病氣の模樣に由ることで、確かな御返事は出來ません、場合に依ては注射して悪いこともあるのです、御自分では無論出來ません、專門の醫師又は病院に於て精細に診察を受けた上でなければ駄目です。

問・端書を以て伺上候、私方小兒（六歲女子）二週間程前少し風邪の氣味にてセキ出で、風は拔けたる樣に候へどもセキ止まらず、セキドメボン〳〵を用ひ候も效なく、近間の醫師に藥をもらひ居候も同じやうにて困り居り候が、家にて行ひ得る療治方御敎示被成下度願上候。（野、美、）

答・小兒が氣管枝加答兒などに罹つた時は、如何なる名醫が如何に盡力しても、一寸治療らぬことは

おりがちのことで決して醫師の悪いのではなからうと思ひます、胸に濕布繃帶を施し、蒸氣の吸入などを行ふて效がありますけれども、それでも直ぐ治療ると云ふ譯には參りますまい、且つこれも醫師の指圖を待つて行ふべきことであります、但しなるべく塵埃の起たない室で湯氣を立て置くやうにし、寒い風にあてないと云ふやうなことは咳嗽の出る時の養生法でありますけれども、矢張醫師の診察治療を止めることは考物であります、小兒は肺炎などを起し易いから注意しなければなりません。



雜報

○東京市の道路改修

東京市に於ては嚢に十六萬圓を以て日本橋區、京橋區、及び本郷區の車道の一部を改修したるが、本年度は國庫補助金二萬六千五百圓に市よりも同額を支出して右改修工事の殘部を竣工せしむることゝなれり、材料には木材、アスファルト、アスベスト等を試用したるが此工事落成せば塵埃飛散も餘り甚しからざるに至るべし。

○東京の鹽物

毎年東京へ入荷の鹽物は鮭十一萬梱（一梱十本入）、鹽鮭鹽鱒七八十萬石（一石六十尾）なるが、昨年は露領産總輸入高鮭鱒合せて九十五萬石、北海道よりせるもの二萬五千石にて、例年は鮭七八分なるに昨年は鱒七分を占めたる爲め、從つて鱒は二割安、鮭は二割高なりと、此等好榮養品の收獲多少は、本邦に於ける中以下の人民に取つて多大の影響あるべきことなり。

○東京市の下水工事

東京の淺草下谷及び神田の第二區より着手する大下水工事は差當り土地の高低其他の實測に着手し既に

大部分結了し一面には三河島の「セプチックタンク」工場及び其敷地約六萬坪程に埋管用地の買收を協議し一面には先づ雨水吐の工事に著手する等にて目下其準備中なるが尙ほ月島の製管工場の建築にも著手し既に三分通り出來したる由にて市役所裏手に建築すべき事務所も近日工事に著手するに至るべく本年度は百十三萬八千圓と昨年度より繰越す三十六七萬圓を合せ約百五十萬圓を以て下水管敷設に著手すべしといふ。

○贋造偏里設林

冬期は凍傷豫防等の目的にて何れの家に於ても特に婦人はグリセリンを使用すること尠なからざるが、グリセリンは比較的高價なるよりこれに單舍利別等を混じて販賣する奸商ある由なれば注意を要す。

○東京の乞食

最近の調査に依れば東京府下に一定の住所なく浮浪徘徊せる乞食は五百四十九人あり、內男三百八十人女百六十九人にて、これを府下現在の人口に比すれば人口一萬人につき僅に二人の割合を示し其出生地は東京百八十六人他鄕の者三百四十人、又年齡十五歲以上六十歲迄のもの三百八十八人なるが此內に於て疾病不具等にて勞働に從事し能はざる人員は男五十七人女二十八人にして之を除き全く勞働に堪へ得るものは男百十四人女九十八人合計二百四人あり、疾病と認むべきものは總數二百十四人にして乞食百に對し三十九人の割合にて、その種類は不具的のもの最も多く、癩病患者十八人神經病者九人を含めるは注意すべきことゝす、年齡い三十五歲より漸次增加し五十歲以上のもの最も多し、又その家族關係を見るに夫婦二十三偶にしてその內子あるもの十偶あり、父若しくは母のみにて子を養育せるもの十四人兄弟二人雜のもの一組あり、乞丐とならざる前の職業は農業最も多く日雇人及び土工之に次げり。

○電車回數劵

電氣局にては回數劵を改正することに內定し通行稅の一部を市に於て負擔し從來の二十回分八十五錢を

八十錢に、三十回一圓廿五錢を一圓廿錢に、五十回分二圓〇五錢を二圓に引下げ來月より實行の筈軍人に對する優待割引は下士以下は從前の通りにして將校は普通の乘車賃を取ることに決するらしく、學生勞働者の割引に關しては學生は證明等の方法により左程困難ならざるも勞働者に就ては困難なる事情あり尙ほ大に研究を要すべきを以て未だ決定せず。

○炭酸瓦斯中毒

鐵道院新宿驛電力工夫五名去る十三一日時頃中野驛構內に在る豫備電車九百七十二號內に入り多量の炭を焚き暖を執り寢に就しが五名とも炭酸瓦斯の爲に中毒し人事不省に陷り居りしを同五時頃車庫檢查番が發見し某醫師の手當にて幸ひ悉く恢復せりと。

○本邦衛生の特色

獨逸ドレスデン市に開催されたる萬國衛生博覽會に參加して我邦の衛生參考品の好評ありしことは既に諸新聞雜誌の屢〻報道せる所なるが、獨逸に於て日本の特色として反響を起したる事項の重なるも、中に左の如き事柄あり。

一、本邦婦人の頭髮の美術的にして而かも其の裝飾用の櫛其他一切の品物が日本自國の製出に係り髮の形に依て既婚、未婚等を區別し得るは日本の特色なり

一、浴場の設備全世界無比にして僅々六ペンス(三錢)を以て衛生的清潔を保ち得るは羨むべし

一、體操中女子の薙刀、小學校に各體操場を有するは獨逸の都會に比しその發達驚くべし又兵式體操の發達に殊に驚くに堪へたり

一、住居衛生に木と紙よりなる家屋を用ゐ而かも火を防ぐには別に土藏なるものを有するは歐洲よりも進步したり

一、料理法の中魚類を生の儘用ゐるは日本に限るものにて西人も倣ふべし飮料中酒醬油等の荷造の美術的なるには驚くべし

一、果物中にも歐洲になきもの多し豆腐、味噌等の製造が悉く豆を材料とする點殊に注意を要す

○巴里の新流行

過般セルニシユ博物館に世界各國の兜の陳列があつたが日本から出品された兜が大評判になつた爲め氣の早い帽子屋は早速其意匠を探つて造つた婦人帽を賣出した所が非常な歡迎を博して目下盛に流行つて居るさうだ

○共立女子職業學校の榮譽

神田一ツ橋通共立女子職業學校にては昨冬十二月廿日生徒の製作品を天覽に供すべき旨御沙汰を蒙りたれば本年始業早々之が製作に全力を注ぎ二月下旬には各科の製作品を叡覽に供し奉る豫定なり同校は創設以來屢々優渥なる恩命を辱うし製作品天覽の御沙汰を拜したるは此に廿二回なり尚同校に於ては今般傳來の規則を整理し新に家庭科を設け經驗ある婦人を聘して高等女學校卒業者の仕上教育に當つること云ふ

廣告

○私立大日本婦人衛生會新年會

同會を去る十四日午後一時より神田一ツ橋通女子職業學校に於て新年會を開けり、參會者は鍋島、濱尾正副會長を始め鳩山、高木、山本、濱田、中濱、田村、長谷川、羽田、宮本、岸、松平、三宅、古市夫人等の諸役員並びに會員約百餘名にて、午後二時總裁東伏見宮妃殿下御臨場、會長鍋島侯爵夫人の挨拶ありて、直に餘興に移り天野雉彦氏の講談『狩野芳涯』の一席なか〳〵の上出來にて殿下にも時々御微笑を洩らさせ給ひ終まで御聽取あり、午後四時閉會、殿下の別室に於て暫時御休憩の後殿下には職業學校生徒の製作に係る造花を御買上げの榮を賜ひ御歸邸あらせられたり、役員諸氏は尚ほ暫く別室に於て歡を盡し、今回同會に於て出版せる醫學士渡邊房吉氏著『活ける家』と云へる美本を一二部づゝ購求の上散會せり。因に同書は嘗て本誌上に連載せる『活ける家』を一括し更に訂正増補を加へたるものに

してその内容の有益にして趣味あり且つ文章の輕妙なるは會員の普ねく知らるゝ所なるが、その體裁も頗る佳にして日常家庭衛生の好參考書たるは勿論、普通家庭の讀本としても適切のものたるを失はず、婦人衛生會員には特に二割引を以て頒賣するの約あり。

當日左の寄附ありたり

蜜柑三箱　鍋島會長

蜜柑壹箱　濱尾副會長

金五圓　濱尾副會長

金貳圓　中濱夫人

○本會入會者

○守屋千代子紹介

●麹町區内幸町一ノ五　特別會員　小川きん子

●京橋區明石町河岸七一　通常會員　野間さふ子

○事務所申込

●牛込區矢來町三　種村なか子

●小石川區戸崎町七　金子トウ子

●香川縣琴平富士見町　大森久子

●朝鮮城津各國居留地　牧せき子

○新潟支會入會者

○鏡淵れう子紹介

通常會員　小林てる子

○正誤

●十一月雜誌入會者　通常會員箕作やす子　とせるは特別會員の誤につき訂正す

○轉居

●兵庫縣揖保郡龍野町へ　中原百合子

●兵庫縣武庫郡御影町ノ内御影村字梅本一三二三ノ第三號へ　中村くら子

●四谷區坂町一〇九へ　横井昇子

ユーキリン

肺結核唯一の治療藥たる結列阿曾篤の副作用を除き然も其効果を完全にせしはスパイヤー博士發見の本劑なり

説明書郵呈

プノイミン

鈴木博士發見の本品は結核腺病特に神經衰弱症の最良強壯劑として現時治療界を風靡する有機性燐劑なり

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

タカヂアスターゼ

高峰博士の發見の本劑は効力顯著なる胃腸新藥なり

類似品あり注意

グリコナール錠

北里博士指導佐伯矩氏創製の本品は衰弱者肺病其他慢性諸症に卓効ある**滋養新劑**なり

説明書郵呈

東京市日本橋區室町三丁目

三共合資會社

私立大日本婦人衛生會發行

醫學士 渡邊房吉著

家庭醫學 活ける家

洋裝全一冊
定價七拾錢

大賣捌
東京市本郷區春木町三丁目卅二番地 南江堂支店
東京市神田區表神保町三番地 東京堂書店

本書は嘗て婦人衛生雜誌第二百十號より第二百四十九號に亙りて連載されたる『活ける家』を取纏め更に修繕改築を經て成れる靈殿なり其宗廟の美百官の富に至ては已に一度會員諸姉の觀覧を經たる所今敢て贅せず、乞ふ一本を座右に備へ更に他に向て推薦せられむことを

本會々員ニ限リ二割引トス

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金弐拾錢 郵税壹錢
三冊（三ケ月分） 前金郵税共 金四拾五錢
十二冊（一ケ年分） 前金郵税共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金弐圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行二十五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ケ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ弐拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

明治四十五年一月十七日印刷
明治四十五年一月二十日發行

編輯者兼發行者 東京市本郷區駒込追分町二十九番地 菲司秋次郎
印刷者 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 今井甚太郎
印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鈴屋町 亘明堂
同市本郷區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入 若林茂一郎
東京市日本橋區呉服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本郷區本富士町 盛春堂
名古屋市本町三丁目 丸善書店

二月の巻發行

定價 一冊二十八錢郵税二錢五厘
六冊前金郵税共壹圓四拾七錢

新婦人

忘れられぬ女
忘れられぬ男

笹川臨風　柳川春葉　青柳有美　廣津柳浪　初瀬浪子　森眞如女史　上山浦路子　小島文子
兒玉花外　泉鏡花　後藤宙外　森田草平　長谷川時雨　尾島菊子　森律子
（以上執筆者）

口繪及寫眞版

飛び梅 あるじなしとて春なわすれそ……川村清雄筆

九州第一梅 今夜君の爲に開く……石川寅治筆

美人駿馬に伴ふ 人は絶代の名媛 馬は天下の驥足……コロタイプ 寫眞

有栖川宮妃殿下　桂公爵令嗣夫人●戸澤子爵令嬢●佐々木博士令嬢●加藤博士令姪●吉田廣臧氏令嬢●伊勢眞弓たづ子嬢　松本工學士夫人　壺屋嬢　藤田敬美氏夫人●名古屋三輪丸子嬢●井内泰子●奥田謙二氏夫人●河野きく子嬢●貝塚八重子嬢●松田代議士夫人●高木文學士夫人松井すま子●上山浦路子嬢●横濱高野眞三氏夫人●横濱山田梅子嬢●夢野千草嬢●眞砂座新女優花村三枝子嬢●甲府武井よし子嬢●横濱齋藤龍子嬢外百餘圖

結婚と肉體の詮義（林田書記官長）樂しき新婚旅行（三輪田學士）ロンドンの娘子軍（内崎文學士）箏曲を習ふ人に（今井慶松）狸の趣味（尾崎恒子）煩悶と運命と慰安（石橋臥波）徳川時代の女傑（岡部精一）

憚られたる姉の日記……故一葉女史令妹 樋口邦子

巻末附録 家庭日誌 二月分

溫度表晴雨表獻立表來客控●九星術暦添

見本 郵券廿錢 ＝賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番